東京立正女子短期大学

論　　叢

第　四　巻

—目　　次—

十法界の研究 ——主として十法界が現代倫理に与える示唆について——	岩本経丸	1
ウイリアムブレェクと彼の二つの作品に就いて	近藤久美子	15
The Woodlanders ノート	小林幹男	21
慧皎における亡身の意味について	岡本天晴	27
Typewriting 教育法の研究　その2 ——Typewriting 教育の展開——	井口美登利	23
教育の経済理論に関する一考察	鍾清漢	5
The Anglo-Satsuma War in 1863: From "The Navy" Translation Continued	近藤久美子	1

昭和四十八年

十法界の研究

——主として十法界が現代倫理に与える示唆について——

岩本経丸

内容目次

一、仏教者の二大伝統と、その中間体系化としての摩訶止観
二、摩訶止観の中心軸としての十法界
三、十法界の基本理念について
四、十法界の理念構造について
五、十法界における人倫の複合弁証法的展開、人類の未来を開く道とその目標

（摩訶止観のテキストは、関口真大校註「摩訶止観」（岩波文庫）上下二巻によった。文中では「文庫」と略記。参考文献、出典は、その都度本文中に明記した。語義の解釈は、主として中村元監修「新・仏教辞典」により、一般的のものは、岩波の「広辞苑」の解説を参照し、つとめて大学の一般学生にも理解し得ることを期しておいた。なお、望月「仏教大辞典」、竜谷大学「仏教大辞彙」、田中智学「本化聖典大辞林」、日宗十万人団結報恩会編「法華辞典」のお世話になったことを併せ記し、先徳の学恩に感謝の意を表する。）

一、仏教者の二大伝統と、その中間体系化としての摩訶止観

十法界のささやかな研究を行うに当たって、まず最初に提起することは、仏教者が古来から育ててきた二つの優れた伝統のことである。その一つは、「静慮」（禅または定、あるいは禅定ともつかわれる）にもとづいて「ひと」の心を練成することを重んじてきたことと、その二つは、「にんげん——人間」の本性について常に解明を深めてきたことであった。この二つの伝統は、西洋の文化伝統、特にキリスト教のそれと比較してみると、正に対照的である。

キリスト教が、神から発して神学を体系づけ、神への一途の信仰を説いた宗教だとすれば、それとは対照的に、仏教は、人間から出発して人間学を組織立て、まず一個の存在としての「ひと」の自覚を確立し、かつ、その心の明澄をまずはかって、しかる後に社会的存在としての「人間」の真実に迫り、ここからさらに世界万象の解明に進み、かくして「安心」に至

ることを教えた宗教であると言ってよいであろう。ブッダとその後継者達が「ひと」と「人間」に加えた解明の跡はきわめて深い。この一文でいう「ひと」とは、われでもありまた他人でもあるところの「一（ひと）」であり、また繰り返しと代替のできない一個の存在でもあるものを意味し、次に「人間」（本来は仏教語）とは、社会的存在としてのみ生き得ている人びとを指す。そして、この両極にわたって探究する観念的ならびに実証的両面の学問を広く含めているものが、仏教の人間学であるとするのが、この一文を貫く見解である。

古代ギリシャ以来の哲学的人間学は勿論であるが、現代科学の諸領域における人間学、特にフロイト学派の心理分析（Psychoanalyse を精神分析と訳すのは間違いであろう）等の原型にいたるまで、人間学の領域に属するものは悉くと言ってよいくらいにブッダとその後継者が残した遺産の中に求めることができると言って過言ではあるまい。しかし、そうだからと言って、ブッダが選んだ方法と対象が現代科学のそれと同じであったというわけでは勿論ない。ブッダが対象にしたところは、ダイナミックな生命活動の全体であって、特にその過程で必然的に現われる生命の質的変化が取り上げられていることであった。このような生命の向上、頽落、堕落等の各面を含めて、複雑にからみ合って展開する人間事象の万般が、ブッダの対象となったところであった。これを静慮の中で八正道、四諦、十二因縁等の思惟の諸形式を用いて解明するのがその方法であった。したがってここに西洋の宗教、哲学、学問一般にはなかったし、今でもなおないような仏教者独特の伝統が育ってきたのである。すなわち、学問の主体者である「ひと」は、まず何よりも先に「静慮」によって中正な思惟を行う能力を自ら修練し、その後に、またはそれと併行して、学問の対象にアプローチしていくという態度がつくられてくるのである。いわゆる名僧とか善知識とか呼ばれる人びとは、皆この静慮をとおすことによって、数値では表わし得ない、また反復できない一回性のむずかしい生命事象に対しても、その正しい把握をなし得たばかりでなく、ここにこそ人生の一大事があると考えてきたのであった。

このような仏教者の伝統とその特徴についての理解をさらに深めるには、それとは対照的な現代科学の方法と対象にもう一度一瞥を加えておく必要があろう。ヤスパースも言うように、現代の「各科学は、方法と対象の枠以外には出られない。それぞれは、世界への一展望ではあるが、どれも世界を捕えない。それぞれは現実の一断面を当てではいるが、現実ではなく、おそらく現実の一面にすぎず、全体としての現実に当たってはいない」（Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, Seite 114）。したがって、科学は生命そのものの全体的活動に触れることはできない。しかもその方法と対象は、常に、数価でとらえ得る範囲から出られず、客観的な物象に限定され、反復し得る事象に限られてくる。それにもかかわらず、科学がとらえた事実は、善悪を超越し、価値を越えて、絶対的のものの如くに万象にのしかかろうとする。かくして現代的冷酷と非人間性がかもし出される。このような科学の犯し易い非人間化を防ぐためには、一人びとりの内面から湧き出る英知が必要となってくる。このような英知が生み出す能力が知見であり、「如実に三界の相を知見する」（久保田正文増補法華経大講座」（第七巻、二八二頁）ことが、現代を救済する唯一の道となってこよう。この知見の涵養は、一人びとりの静慮をとおし、長い人生にわたり、

誠実に経験を積む中で、自ら学び取る以外に方法はない。若しこれを忘れれば、人類は中生代の爬虫類の轍を踏むに至るであろう。

ブッダの生活は、このような静慮による自己修練と、その過程で開き得た知見とにもとづいて、六師外道の論理の遊戯や世俗に堕した諸説をアオフヘーベンすることによって、真実の人間生活と人間の学問とを建て直すために捧げた一生であったとみることができよう。そして、その弟子達はこの方法を継承し、よき教団（僧伽）を結び、この仏教伝統を育てていった。そしてさらにアショカ、ミリンダ、カニシカ等の歴史的諸王の外護の下で次第に教理と教団の発展が行われ、大乗思想への道が開かれていく。これ等の成果がやがて中国に渡ってから、大陸や、さらには日本の、仏教教理の発展とその実践修行の進展をはかる上の挺の役目をつとめる人間学と静慮の方法とが体系化されてくる。この時点で一つの金字塔を打ち立てたのが、中国の智者大師智顗（五三八～五九七年）であった。この人によって、この二つの優れた仏教的伝統が深められ、かつ、体系化される。その代表的業績が、大師晩年の講義であり、これを弟子灌頂が筆録して大成した「摩訶止観」である。この中で説かれている一念三千の一大思想体系は仏教人間学の一つの完成であるが、また同時に、静慮の修練の到達すべき究極の境地を示したものでもある。

摩訶止観は、ブッダが開発された人間解明の尊い二つの源泉について、その後継者達がとらえてきたところを適確に再編成した上、さらにその流れを正しく後世に導く立派な水路をつくり上げたものとして、不世出のかつ歴史的の業績となった。

二、摩訶止観における十法界の位置と意義

摩訶止観の内容を一言で要約するならば、智者大師が、ブッダの人間観ないし社会観を十法界としてまとめた上、さらにこれを軸として一念三千の法門にまとめ、これを拠り所として、仏教者の最も重要な二大伝統であるところの禅的思惟の練成方法と、人間事象の万般との二つを説ききたり、説き去っているところにあると言ってよいであろう。

まずこの書名であるが、この書物につけられた名称そのものがその内容を物語っている。すなわち、この冠頭につけられた摩訶とは梵語 maha の音を写したもので、通常は大・多・勝等の意味を持つが、一般的には大の意味に用いられるとされる。また止観の止は、心を練って一切の外境や乱想に動かされないことを意味する śamatha の訳であり、観は vipaśyanā の訳で、正しい知恵をおこして対象を見ることを意味するとされる（中村元、「新・仏教辞典」の解説による）。智者大師自らも「まどかに無明を伏するを止と名づけ、（相）似の中道の慧を観と名づく。」（文庫、上巻、六七頁）と述べ、また、「すでに無明即ち明なりと知れば、また流動せず、故に名づけて止となす。朗然として大いに浄し、これを呼んで観となす。」（同上三二頁）とも述べている。

止観においては、静慮ないしは禅的思惟の練成によって、まず学問研究の中正な対度をつくることを学究の第一条件としてきた。これは、ブッダの教えとその実践者の大特徴であって、西洋の学者達には乏しいところである。近代の西洋の諸学は、中世のドグマ的時代への反動として起こった激しい知的渇望や、イギリスに発した功利思想や、それから尾を引くアメ

リカの世俗的実用主義等に、その発生の根源を持っており、止観で説かれるところはもとより、一般東洋系の諸学が、ものの真実を誤らないことを第一義におき、また、大自然との冥合の道を求めようとする意図から発しているのとは大いに異るところである。現代西欧から発生し、発達し、アメリカにおいて高潮に達した現代の科学時代と、それを夢中で追跡してきた現代日本の科学時代とは正にこの盲目の知的渇望と功利との害悪に引き込まれている。知的渇望は新しいものの発見発明を見て狂喜するが、そのものが人生に如何なる意味を持つであろうかを考えようとはしない。功利の行動は目前のしかも世俗的欲望を達成はするが、今日の真実をおおい、明日への正しい道を失いつつある。この知的渇望と功利という夫婦によって育てられてきた末子でわがまま者の現代科学は、家の伝統や子孫の行く先も考えようとしないで、惜しげもなく庭の樹を切り、さびのついた庭を掘り返し、あげくのはてはブルドーザーで一夜のうちに伝来のわが家を蹈みつぶし、これをごみと一緒に海にほうり込んで、その上に多少の土をかけて夢の島とやらをつくり、そのあと地や埋立地にはありとあらゆる発見発明による新しいものを盛り込んだ「現代文明」と称するわが家や工場を建てるようなことをあえてしてきた。しかし、その家がはたして人生にとって何か有意義なものになり得るであろうか、そういう家を建てる過程や結果が何か大きいマイナスをつくりはしないか、あるいはまた、こういう家で必要以上のぜいたくをし、前の生活よりも何十倍もの消費をしているというだけで、はたして人生の実質的向上を実現し得たと言い得るであろうか、等々は少しも考えようとはしなかった。正に近代の西欧に発した科学精神は、近代の西欧を風靡した「ファウスト博士の物語」(Volksbuch vom Doktor Faust) に象徴されるように、盲目的な知的渇望から発し、中世的ドグマの奴隷からの解放を欲しながら、知識の餓鬼に化し、再び知的奴隷のこころに変ろうとしている。現代日本においても、有力な知識の発見は、意味も価値も問われずにもてはやされる。また精神や生命に触れる学問は、それが客観的につかめず、再現し得ないが故に学問としては疑われ、学問の領域から追われようとしている。この最も象徴的なことは「日本学術会議法」という法律である。ここで「学術」とは名称だけであって、この法律の条文のどこを見ても、学術という用語は出てこないで、ただ科学ということばのみが出てくるにすぎない。したがってここでは、学術は科学と同意語のようであり、科学以外は学術ではないことにもなりかねない。しかし、これは大変な誤りだ。現代の科学は、数値でつかみ、客観的にとらえ、しかも再現し得る現象以外には手を出そうとしないし、また、今のところ出し得ない。したがって、一回性の生命の意味については無知である。また、科学の分析実験の結果出てきた事実は善悪を超越し、価値を問おうとしない。したがって没価値的である。そうであるのにわれわれの生命内容は数値では計りきれず、客観的にも捉え得ず、反復再現することもできない。しかも生命の存続と成長は多く価値に負っており、その価値、特に精神的価値は数値で表示することは絶対に不可能であって、知見にもとづく明察によって評価するより外に方法はない。われわれは、洞察によって生命の真実をとらえようとする努力の上に、学術の最高任務をとりもどさねばならない。こういう点を正しく突き、現代になお教訓を垂れているのが摩訶止観であり、特にわれわれの思考における偏りを防ぎ、邪見を打破する拠り処としての一念三千の法門が説かれる。言うまでもな

く十法界はその中軸となっている。

一念三千の内容は極めて深くかつ広い。この法門を説く摩訶止観は、一般の仏教者、特に法華経研究者等の基礎学として、仏教者万人の必読の書物となった。この研究と註釈については先学の業績が数多くある。ここでは、一念三千が、摩訶止観で説くところの静慮の正しい方法を示すものであるとともに、静慮の到達する極致でもあることに言及するだけにとどめ、その骨格構造をつくっている十法界の意味するところを、改めて考えることとする。

まず、智者大師によってこの十法界が体系化されるまでの過程を見るのに、既にブッダの先行思想家や同時代のジャイナ教の中に、地獄・畜生と人間・天上の二系列にわたる四つの観念が出てくる(中村元「印度思想史」四十七頁)。この四つのものを観察すると、前半の系列は後世にいわれる「三途」の、後半の系列は「三善」の原型であると言えよう。前半と後半のそれぞれには内面の関連があるし、またこの前後の間には次元の相違をも認めることができる。また別の観点から見て、この四つの観念が取り上げられているということの中に、既に、人間の現実の存在状況についての哲学的ないし社会学的な解明が行われ始めたことが洞察される。これ等の伝統を受けたブッダは、さらに一次元高いところに声聞・辟支仏(縁覚)・菩薩の三つの観念をつくるとともに、この三つの観念の系列になぞらえてか、あるいは、各次元内における弁証法的な発展現象に思い当たったためか、地獄・畜生の次元に餓鬼を加え、人間・天上の次元に阿修羅(修羅)を先行させて、それぞれの次元に三段階をおき、さらにその上に仏界を最高次元として置いたものと想像される。かくして華厳経の十地品の中に至ってこの十の全部が顔を揃え、十法界に近い体系的なものが現われてくるし、特に法華経では到る処でこの十のものがあげられてくる。これがさらに竜樹(一七〇～二六〇年)の大智度論に至って声聞道・辟支仏道・菩薩道・仏道が四道としてあげられ、また、地獄道・畜生道・餓鬼道・人道・天道が五道と称されたり、あるいは阿修羅道を加えて六道があげられてくる。そして、この六道に前の四道を加えれば十道となり、ここに智者大師の十法界の母体や、六凡ないし六道に対する四聖という分けかたの先駆が出てくることになる。ただし、なおこれ等の論部や経部には十法界ないしは十界というような名も体系も現われてはこない(佐々木憲徳、「天台教学」一六九頁)。これが智者大師の摩訶止観において、始めて十法界として取り上げられ、体系的に説かれてくる。

この十法界の説から、さらに「十界互具」の説が立てられるが、これは、各法界のそれぞれに、他の九界が含まれているという説である。したがってここに百界が生じてくることになる。ところが、この万象の当体たる十界とか百界とかは、「相・性・体、力・作・因、縁・果・報、本末究竟」等の十の実相(十如、または、十如是)の中でそれぞれに異った現われ方をする。ここに千界が生ずることになる。さらにこの千界は、三種の世間において三千種の人生模様となって展開する。三種の世間とは三つの人間環境を意味し、一つが社会環境を意味する「衆生世間」で、二つ目が自然環境を意味する「国土世間」、三つ目が習俗や文化的環境を意味する「五陰世間」である。この三種の世間において三千という無数に近い人間模様の展開は一念の心の中に感ぜられ、とらえられるものであり、また、一念の心の中からつくられる所産でもあるという「一念三千の法門」に達する

このところに触れた摩訶止観の原文は、次節に引用しておいた。

摩訶止観が禅的思惟の修練を説く目的は、この一念三千の妙理を体得させようとするところにある。すなわち、一念の中に三千が具わる故に、一念のあり方に静慮を加え、一念の逸脱を防がねばならないし、また、若し一念が固定するならば、ものの真実がおおわれることにもなる。こういう事態を起こさないことが人間の生を全うさせる要件である。そして、この一念三千の体系は十法界を骨格として組み立てられているのである。言いかえれば、十法界は摩訶止観の主軸となっている。

三　十法界の根本理念について

十法界は、根本的に何を意味しているのであろうか。これについて止観の中で触れているところは、第五巻の次の一句である。すなわち

「十法界は、通じて陰入界と称するも、その実は同じからず。」（文庫、上巻、二八〇頁）

と出ている。つまり、十法界とは、一般に陰入界を指すのであるが、その十種の陰入界には皆それぞれに相違がある、とまず述べるのである。

そこで、「陰入界」という概念が十法界を貫く理念の芯を支える大事な概念であることがわかる。では、この陰入界の概念について摩訶止観それ自体が説明しているところはないか。それについて答えているのは次の一節である。

「第一に陰入界の境を観ずとは、五陰・十二入・十八界をいうなり。陰とは、善法を陰蓋す、これ因について名を得たるなり。また陰とは、積聚にして、生死重沓す、これ果について名を得たるなり。入とは渉入なり、また輪門と名づく。界とは、界の別なるに名づけ、また性わかるるに名づく。」（文庫、上巻、二七六頁）

と出ている。すなわち、陰とは、世俗においては、ものの真実をおおいかくす作用、または、宿習や宿弊が重なったり固着することを意味するが、しかし反対に善因善果の重なることによっては、正しい陰も生ずるのである。たとえば、この引用文から数頁後に、「仏には諸の大と陰と界と入となしとは、まえの九界の陰界なきなり。いま有りというは、涅槃の常住の陰界入あるなり。」（文庫、上巻、二八一頁）がそれを言っている。次に「入」と「界」の意味は、現代日本語の観念で解釈しても大きい誤りはない。この五陰、十二入、十八界の三つが相互に作用してつくり出される各種の社会像を「陰入界」というのであるが、その中で最も重要な概念が「五陰」である。

五陰は、後世には五蘊とつかわれ、世俗の意味では、人びとの心にさまざまな仮象（Schein）を構成させる五つの要因のことである。すなわち、色・受・想・行・識の五つの要因で、この五つが相互に相関連することによって、真実が隠されたり、宿弊が積み重ねられるという悪結果が生ずるとする。これを静慮にもとづく正しい思惟によって、このような悪果を起こさず、反って一般衆生を救う浄行を行じ得る人が理想の人であり、このような理想の人を菩薩といい、そのような性情が仕上がりかつ定着した人を仏というわけである。したがって、静慮ないし禅的思惟を経ない色・受・想・行・識は「あやまちのおこない」、すなわち「業」をつまざるを得ない。ここで言う「色」とは物質ないし肉体を意味し、第二の「受」とはわれわれが外界を受け入れる感覚や知覚を、第三の「想」はわれわれの内

心に起こる観念の構成を、第四の「行」とはわれわれの行動のもととなる意志や記憶等の心の作用を、第五の「識」とはわれわれの心が結論的に出す了別または判断等を意味する。この五つの中で、色(しき)は形を持つ具体的客観的に認識し得るものであるが、その外の四つはわれわれの心理・心識・意識等の心の現象にかかわるものである。したがって、この四つの心の領域において誤りが起こるとすれば、その結果は決定的に悪くなるわけである。そこを止観が指摘し、そのような悪業を避けるためには、常に、「念を法界にかけること(止)と、念を法界と一にすること(観)」(文庫、上巻、十二頁)が必要となってくる。この結論に導くため設定された一種の仮設が十種の陰入界、言い換えれば十法界である。以上によって十法界の根本理念を解明できたと思うが、なお付帯的に次の点に触れておかねばならない。

付帯的なものとして第一にあげるものは十二入である。これはまず、眼・耳・鼻・舌・身・意という六つの感覚をつかさどるもの、すなわち「六根(ろくこん)」が関係してくる。この六根が、外から入ってくる刺戟を受けると、まず意識がおこるとともにその対象が浮き出てくる。この意識対象は、色・声・香・味・触・法(この法とは、さまざまな事象を意味する)という六つの思慮の対象である。ここに、内心には、六つの心境、すなわち「六境」が生じる。この六根と六境を合せた十二が、われわれの知覚ないし認識を取り入れる十二の入口である。止観のことばを用いれば、この十二の「輪門」をとおして知覚や認識が「渉入」してくることが、この「十二入」なのである。

次に十八界の意味についてである。さきの十二入によって、十二の心境や感懐がおこるわけであるが、この心境や感懐によって現実の状況の中に何かの境地が生ずるわけである。そういう境地は、人びとの心に結ばれる一つの小世界であるが、それをここでは界と名づける。そこで、十二入によって十二界が生じることになる。ところで、この十二入の半分をつくる六根は、ただ単に外部からの刺戟を受け入れるだけでなく、度重なる刺戟に対しては、次第に熟練した判断能力をつけるようになる。かくして生じるのが、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識という「六識」である。日常生活に例をとれば、目ききとか、音を聞き分ける優れた音感とか、聞き酒の能力というような、身についた判断能力とか特技である。これもまた、その人の持つ小世界で、ここに六界が起こる。この六界と、まえの十二界を合せたものが十八界である。

以上をまとめて言うならば、われわれのつくっている人間(社会)の万般は、五陰・十二入・十八界というようないろいろの要因が複雑多様にからみ合って発生する現象であって、これを止観では「陰入界」と呼んでいるのである。したがって、「陰入界とは、われわれの内外両面の、ないしは、物心両面の多様な諸条件が複雑にからみ合った上で展開されている千差万別の人間存在の状況一般を言う」と定義的な解説を行っておく。

このような千差万別の人間存在の状況一般を通観するとき、如何なる事象においてもそうであるように、そこにもまた何かの共通点を持つものの類型が識別されてくる。ブッダは、この人間存在の状況一般の中にある類型を十類型に分けて表現された。これを、諸経の結集者達や竜樹等が次第に系統的に整理し、智者大師に至って、地獄・餓鬼・畜生、修羅・人間・天上、声聞・縁覚・菩薩、仏という十の法界序列と四つの次元別とに系統

づけた。ここに、この「十」という数と「法界」ということばの意味するところについて触れておきたい。

既にしばしば引用した正観第五巻の中で、「法界」と「十」との意味について、次の如く述べている。

「法界とは三義あり。十の数はこれ能依なり。法界はこれ所依なり。能所合せて称するが故に十法界という。またこの十法界は各各の因、各各の果、相混濫せず、故に十法界という。またこの十法は、一一の当体みなこれ法界なり、故に十法界という。」（文庫、上巻、二八〇頁）

この一句によって、「十」とは、さまざまな社会相を生み出す動因の出所を象徴し、「法界」とは、その動因によってつくり出される現実の社会状況を意味し、この動因の「能」と、それをこおむる「所」との能所の合せられたところが十法界であるとしている。したがって、「十」は実数ではなくて、多様に発現する動因の象徴である。故に、ここから「十界互具」によって百界が展開し、さらに「一念三千」の法門が述べられることになる。これについて止観は次の如く述べる。

「それ一心に十法界を具す。一法界にまた十法界を具して、百法界なり。一界に三十種の世間を具し、百法界はすなわち三千種の世間を具し、この三千は一念の心にあり。もし心なくば已みなん。介爾も心あればすなわち三千を具す。」（註、介爾、または芥爾の心――わずかばかりの心の働きの意）（文庫、上巻、二八六頁）

さて、ここに引用した一句によって益々明らかなように、智者大師の思想の最高峰とも見るべき一念三千は、この十法界から演繹されていることが確実となる。そして、十法界の根源はブッダの人間観ないし社会観である。そしてまた、止観が説く究極の目的が、まず一個の「ひと」の内面に禅的思惟の能力を開発させ、つづいて、社会的存在としての「人間」には一念三千の妙理を悟らせるところにあるとすれば、その軸となったブッダの人間観ないし社会観を十法界という体系に始めて組織し、しかも今日に至るまでにそれ以上に出る者が出ないというような偉大な業績を残したことについては、さらに改めて再評価されなければならないし、また、またこれを現代の諸科学のあらゆる面と照合して、その尽きない価値を再認識しなければなるまい。

十法界は、摩訶止観の骨格部であるばかりでなく、ブッダの悟りの最も根本である人間観ないし社会観の最初の体系化であり、しかもその後においてこれをしのぐ体系化がなされなかったという点で、今日においてもなお依然として一大金字塔である。若し十法界の体系化が行われなかったとすれば、一念三千の法門も成立し得ず、不世出の名講義である摩訶止観の講案も成り立たなかったであろうし、また、法華経思想の普及も違った形をとったであろう。しかるに、何故か、十法界の研究は忘れられてきた。あたかも、分りきった通俗説でもあるかのように、多くの学者はその表面を素通りしてきた。永遠の真理は案外に足もとに置き去られている。

三　十法界の理念構成について

十法界の内部の思想構造について、摩訶止観それ自体はどのように述べているであろうか。これについて直接に触れている箇所は、前項で、十法界の根本理念のあり所を示す句としてあげた「十法界は、通じて陰入界と称するも、その実は同じからず」のすぐ後をうけて出てくる次の一節である。

「三途はこれ有漏の悪の陰界入、三善はこれ有漏の善の陰界入、二乗はこれ無漏の陰界入、菩薩はこれ亦有漏亦無漏の陰界入、仏はこれ非有漏非無漏の陰界入なり。釈論にいわく、〝法の無上なるものは、涅槃これなり〟と。すなわち非有漏非無漏の法なり。無量義経にいわく、〝仏には諸の大と陰と界と入となし〟とは、まえの九の陰界入なきなり。いま有りというは、涅槃の常住の陰界入あるなり。大経にいわく、〝無常の色を滅ずるによって常の色を獲得す、受・想・行・識もまたかくのごとし〟と。常楽の重沓するはすなわち積聚の義なり。十種の陰界同じからざるをもっての故に、故に五陰世間と名づくるなり。」（文庫、上巻、二八〇～一頁）

さてこの僅か数行の中に問題点が沢山に出てくるが、問題にするまでもなく明かなところは、仏界を除く九界が三つにわかれているところである。すなわち、三途、三善、二乗と菩薩の一群との三つである。また別に、三途、三善、二乗、菩薩と四つにわける見方もあるが、しかし、二乗と菩薩はいずれも世俗を超克している点で同一次元に属するから、次第にこの三つを含めて三乗と呼ぶ呼び方が一般化してくる。既に摩訶止観の第七巻の中で、声聞、辟支仏（縁覚）、菩薩を三乗として扱っているところが数か所に出てくる。また第八巻には「即空・真諦・無言説の道は、また違にあらず順にあらず、これに違すればすなわち六道の有漏の業を成じ、これに順ずればすなわち三乗の無漏の業を成ず」（文庫、下巻、一二三頁）とあり、明らかに六道、すなわち三途と三善に対する三乗の概念が成立している。そこで九界の体系は、三途を脱却して三善に至り、さらにこれを克服して三乗へと向上の道を示す体系であると言える。そして三途、三善、三乗にはそれぞれにまた三つずつの人間類型が含まれている。したがって九界は複式の三段構造、換言すれば弁証法的な外形を持ち、その一切がアオフヘーベンされて、仏界に到達する。十法界の構造は、このような人間内部の発展過程の投映である。

それでは、このような内部の発展をうながす要因について、摩訶止観ではどのように見ているかといえば、それは、この引用文の中に現われた次の五つの要因である。①「有漏の悪」の陰介入によって三途の苦の世界が、②「有漏の善」の陰界入によって世俗の三善の世界が、③「無漏の陰界入」によって二乗の世界が、④「亦有漏亦無漏の陰界入」によって菩薩が、⑤「非有漏非無漏の陰界入」によって仏の境涯が生ずると説かれてくる。ここで問題となるのは有漏と無漏、亦有漏亦無漏、非有漏非無漏等の語義と、陰界入とは何を意味するかである。前の引用文においては陰入界と出てきたのに、ここでは陰界入とつかわれている。まずこの点から考えてみたい。

陰入界の意味するところは前節で述べたとおりであるが、これと、ここでいう陰界入との意義について、望月仏教大辞典の説明するところによれば、この二者は同義に解されている。しかし摩訶止観では明瞭に使い分けられており、また「陰界」とか「陰入」という用法も出てきて、各巻の到る処で使いわけられ、ここでもまた明らかに使いわけが行われている。結論的に言えば、「陰界」は名詞的概念で、「陰入」は動詞的概念である。「陰入界」と「陰界入」もまた同様である。前節の引用文によって明らかなように、われわれの世界、特に地獄界から天上界までの六界では、「五陰」（色・受・想・行・識――五蘊）の作用によって人間の真実性がおお

いかくされたり、またそういうことが積み重なって、間違った人間像や社会像が心の中で固定されてくるが、そういうさまざまな人間像ないし社会像を「陰界」と名づけている。そして、そのような考え方が心の中に生ずること、ないし、心の中に入ってくることを「陰入」と呼んでいる。故に、「界内外の陰入はみな心に由って起こる」（文庫、上巻、二七八頁）とか、「入とは渉入なり、また輪門と名づく」（文庫、上巻、二七六頁）という説明が行われる。しかし、こういう機序は、十界の中の九界において、特に三乗を除いた他の六界（六道）において起こるものであって、仏界では「まえの九界」が起こらないばかりか、一八〇度転換して「無常の色を滅するによって常の色を獲得し、他の四つの受・想・行・識もまたかくの如し」（以上三か所の括弧内については、九頁上段の引用文参照）となれば、ここに仏界が出現することになる。したがって、仏界を除く他の九つの法界における陰入界とは、「善法を陰蓋し、生死重沓する」という現象の下で出来てくる悪い社会像、またはなお悪から抜けきれない社会像、あるいはまだなお善きものとしては未完成にある社会像を指す名詞的概念である。なお、これを言語構造から見ても、「界」がここでは基本語で、かつ名詞概念であり、これに冠せられた「陰入」は動詞概念であるとともに、「界」の形容詞的規定詞となっているから、この点からも明瞭に名詞的概念と言い得る。これに対して「陰界入」とは、「入」が基本語で、かつ動詞概念であり、この動詞概念の主語的意味を持つ「陰界」が接頭語として付いたものである。すなわち、「宿弊や矛盾が積み重なったことから起こるところの、悪い、あるいは、まだ悪から抜けきらない、あるいはまた、まだなお善きものとしては未完成の社会像が心の中にしのび込んでくる」ことを現わす動詞的概念である。そこで、「三途はこれ有漏の悪の陰界入」という句の意味するところは、「三途という三つの悪の道は、〝有漏の悪〟が入り込んで起こったものである」との意と解せられる。以下同様である。

次に問題となるのは、「有漏」と「無漏」の概念である。「漏」とは、梵語 āsrava の訳、原意は「流れる」の意で、人間がこの世の中で煩悩のために無意識、無思慮、無分別に流し出している過失を指している。そういうあやまちを流し出す煩悩の根源を、摩訶止観では「一念の欲覚、はじめて起こるにははなはだ微なるも、即ち遮止せざればついに漸く増長す」（文庫、下巻、一六八頁）と述べ、一念の欲覚とか煩悩とかは、放置すれば際限もなく増長するものとしている。そして有漏とは際限のない煩悩と結びついて、次から次へとあやまちを重ねていく心的傾向を指している。「無漏」とは、そういう心的傾向が、静慮の修練によって克服された状態を言っている。したがって、①有漏の悪から三途ないし三悪道の世界が、②有漏の善からは世俗的な三善の世界が、③無漏からは個人的に有漏を脱した二乗の世界が、④亦有漏亦無漏からは有漏無漏の両極をふまえて浄行を行ずる菩薩の世界が、⑤有漏無漏を揚棄した非有漏非無漏からは、知見と慈悲によって人格を完成する仏の世界が生まれることを説く。これが、十法界の内部を支える理念構成の輪郭である。

五　十法界における「人倫の複合弁証法的展開」

摩訶止観に現われた十法界を通観して、まず第一に気がつくことは、ここに人倫の問題がほとんど網羅されていることである。それ等の問題は次の四つの焦点に絞ることができよう。

第一は、仏界を除いた九界の中心部に、外を社会的存在として、内に一個の存在としてのひとの概念を含めて「人間界」の概念が立てられていることである。十法界は、この人間界を中心として、人間の向上の方向に四つの法界が配置され、堕落ないし頽落の方向に同じく四つが位置せられ、その全体の上に人間の完成としての仏界が太陽のように輝き、一大人間図絵が展開されている。このような壮大な人間図絵を支えているのが、この「人間」という独得なことばの持つ概念である。今では完全な日本語となった「人間」ということばの持つ人倫的意味については、かつて和辻哲郎がその著「人間の学としての倫理学」（同書五〇頁）において取り上げたが、何故か彼はこのことばが十法界の中心構造をつくっている重大な概念であることに言及しなかった。仏教的造詣が深かった和辻教授がなぜここに言及しなかったかと思うと不思議にたえない。「人間」ということばは完全に仏教語で、梵語 manusya を羅什（三四三／四～四一二／三）が人間と漢訳したことから始まる。それ以来約一五五〇年、また智者大師（五三八～五九七）が摩訶止観の講義においてこの語の意義を深めてから約一四〇〇年、さらにまた、法華経やその他の経論が日本に渡来し始めてから約一三五〇年、この時間の経過の中で、社会的存在を現わす「人間」が一個の存在としての「ひと」の意味をも兼ねるようになった。十法界の中の人間の概念は、正にそういう観念の形成に道を開いている。しかし、法華経やその他の諸経の中に出てくる人間の用法は社会の意味に用いられていて、「ひと」を現わしていない。また、現代中国語においても「人間」は「ひと」の意味とはならない。これを思うと、智者大師が、十法界の中で「ひと」の意味を含めた「人間」の概念に作り上げたことと、日本の明治までの人びとが、われわれ一個の「ひと」は同時にゾーオンポリティコンであるというような意識で人間ということば用いてきたこととは、世界の倫理思想史上に特筆すべきことであろう。ただこの概念は、智者大師の中国では一般化しなかったし、一般化した日本では、明治以後になってマンやメンシュの持つの概念と混同して、切角の優れた独得の意義を失ってしまった。それとともに、人様とか世間様というような人倫尊重のことばも失われ、また反面に、人間関係とか人間社会というような同義語を重ねて使うおみおつけ的の重複もあらわれてきた。われわれは、十法界の中心に位置する「人間」が、「一個の存在であると同時に社会的存在として生き得ている生物」という傑出した概念を作り出したことに注意しなければならない。

第二は、したがって、十法界には、他の宗教と異なって、如何なる神も出てこないことである。そして、神や天よりも以上に重要とされていることは、人間が質的な変革を経て次第に向上していくことであって、この向上の道が極めて系統的に、何んの手れん手くだや、迷信や奇蹟をまじえず、今日流行のことばで言えば、科学的に説かれていることである。この過程に声聞・縁覚・菩薩の三乗がおかれている。一個のわれに沈潜して、もっぱら他の声や宇宙のささやきに耳を傾ける声聞は、ある段階に達したとき、決然立って自ら真理を探究する機縁を求めつつ活動する縁覚（独覚）の境地に進み、ここにおける努力を積むうちに豁然としてわれわれが社会的存在であり、この存在をただし、正しく保つ慈悲の行（ぎょう）を行うことが人類究極の使命である」という自覚が生じ、この自覚にもとづいて実践に生きる菩薩に到達する。この質的な三変革の中に生命の最高の弁証法的発展を見る

のである。

第三は、したがってまた、十法界には、人倫の自覚に至らぬ者、悪い人倫に堕ちた者、反人倫的行為を犯す者等の場合も指摘されてくる。ここには、慈・悲、仁、アガペー、カリタス、フィリア、エロースというような、人倫を結ぶ愛に関する概念はおろか、そういう一切の傾向すら出ていない。そればかりか、逆に、恐れ、不安、絶望等の心理面の悪や、脅迫、迫害、貪欲、無道等の行動面の悪も、頽落、猜疑、虚無等の思想面の悪までがはびこっている。これ等のものが止観で言う「有漏の悪」であり、その発生要因が「一念の欲覚の増長」である。止観は、ここにまた三つの段階を挙げてくる。最初に、「貪引・無道、乃至、四重・五逆」を地獄の相とし、次に、「慳惜守護し、他家を慠む」を餓鬼の相とし、三番目に、「慚耻を知らずして魯扈觝突し、礼儀なくして人種を亡失す」（以上の三箇所の引用場所、文庫、下巻、一六八頁）るのを畜生の相としている。これを現代的に翻訳すれば、地獄とは、人倫についての無自覚の故に、一切の社会関係を知らず、しかも「一念の欲覚」に追われて、混乱し、絶望し、懊悩する者と言うべく、次の餓鬼とは、他人の所有を犯しても生きのびようとする者を指し、第三の畜生とは、人倫道徳を無視した中で強行される人間関係の発生ないし出現の社会を指していると言えるであろう。これをさらにフロイト流（Siegmund Freud 1856～1939）に言えば、リビドーが全く吐け口を失ったときの苦悩と狂乱の境地が地獄であり、ただ一個の生存の為に食や職を漁り歩く者の象徴が餓鬼であり、こういう野性動物的な個の存在であっても、性欲の為めには強引に力をもって動物的性交（相手の同意を得ない関係を強行する一例）にも走るのが畜生である。ここでは、現代の心理分析学（註、精神分析という訳語は間違っている。精神の分析は不可能である。）があげている闘争欲、食欲、性欲という人の三つの基本欲が密接に関係してくる。この三基本欲が人倫を無視して、あるいは人倫から頽落（verfallen）して発現されたときに、地獄・餓鬼・畜生の三境地が出現すると言い得るであろう。しかし、人類が、次第に言語を発達させていく過程で、新しくコミュニケーションの方法や内情を育てていく。これによって「三途」が揚棄され、三善が登場してくる。

第四は、前述のような三つの悪の道を、「善」をもって揚棄することによって、修羅・人間・天上の三法界が出現するが、この三善道はさらにまたアオフヘーベンされて、前記の第二に述べたようなつぎの高い次元に向上すべき道が示され、またその方法が説かれてくることである。何故に三善道が再び揚棄されねばならないのか。善とはそもそも如何なるものなのか。世俗の善ほど不安定であり、相対的であるものはない。カントの言うように、無条件で善と言い得るものは、ただ一つ善き意志（「道徳形而上学の基礎づけ」）のみであって、時々刻々に状勢と価値観の変る中にあっては善の評価は常に定まらない。ましてや、若い生命の中に突然として目覚めてくる知性が、何等の静慮の過程を経ることもなしに、目前の事象に触発するようなことにれば、総ての古いものに向って、再び激しい闘争を開始せざるを得ない。これが修羅である。地獄が盲目的、衝動的リビドーの暴発からくる闘争・混乱・あがきの世界であるとするならば、修羅は目覚めたばかりの知性を盲信し、自らの判断に自ら陶酔して、狂気の如く闘争する境地に外ならない。この自己陶酔から発する闘争は、なかなか理性的には解決できないが、しかし、現実の厳しい事実はこのような独善的闘

争を許さないし、第一に闘争者自身を餓死させざるを得ない。そこで修羅の闘争心は揚棄されて、とにかく現実に妥協することになるが、不安と迷いと疑惑は尽きることがない。この境地で迷いつつ生きるのが人間である。すなわち、人間とは、現実の要請によって社会的存在を遂げてはいるが、未だなお真実の社会的存在の方法を模索している境地を言う。この模索は、人類が覚えた知性の追及の中でまず行われる。知性は理性という高度の知性に発達して現実をさまざまに観察し、利用し、遂には自然を分析し、再編成して、巨大な財貨を創り出す技術を開発し、物質的に豊かな世界を実現する。これ等の世俗的、現実的業績を果たした者が天上界に属する人びとである。この天上界には三界（欲界、色界、無色界）の二十八天というような、世俗の世界の様々な理想境が想定されてくるが、しかし十法界ではこれをまたアオフヘーベンする。現代でも、この豊かな社会のこのままの発展は、やがて地球の破滅を懸念させているように、現代は再び、ブッダの時代やその他の歴史的時代の行づまりや破滅に見た如く、歴史的行づまりに当面し、ローマの没落のみならず、マンモス時代や爬虫類時代の終滅と同じ運命をたどらないとも限らなくなった。ここにまた大次元におけるアオフヘーベンを必要としている。十法界では、世俗の世界での、換言すれば、現世的知性（有漏の善）の下で運営される世界での幸福と繁栄は仮象（Schein）にすぎないことを指摘し、これを揚棄して、真の浄福を考え、探求し、さらにこれを実践するという三つの道、すなわち三乗を説いてくる。三乗は、三悪道を否定した三善道を再び否定するという、否定を否定する上に立つ最後の大肯定として登場する。ここに、三悪道、三善道、三乗という三つの大次元間の弁証法的発展が説かれてくる。

最後に、この三乗の次元内における弁証法的関係を見ておかねばならない。まず三乗は、有漏の善を、すなわち世俗的人倫を超脱するところから始まる。具体的に言えば出家である。出家とは、カント的な思考法を借りて言うならば、単なる合法性や常識的な人道主義をかなぐり捨てて、絶体的な当為の根拠となる真理を、聖者の声に、大自然のささやきに聞こうとする第二の学習者を意味する。換言すれば、世俗の世界に生きるために受けた教育による第一回の学習を打ち捨てて、真実の教えを求める第二回目の自学自修を開始するために、現実の世の中を離脱することを意味する。この意味において、声聞は再び人倫を離れて、自己に沈潜する。しかし、ここで人倫を離脱するのは、あくまでも世俗の仮象の人倫であって、これを捨て去ることによって、あるいは、これを超越することによって、最高でしかも永遠の人倫に到着することを目的としている。この関門を経て、自ら機縁を開いて学ぶ縁覚の境地に達し、ここにおいて得た覚りによって、再び縁覚を揚棄して菩薩の境涯を開くことについては既に触れたところである。しかし止観の中でも「二乗は善なりといえども、ただよくみずからを度するのみ、善人の相にあらず」「文庫、上巻、一〇三頁）と言われ、また大智論では「むしろ悪瀾野干（あくらいやかん）の心を起こすとも、声聞、辟支仏（縁覚）の意を生ぜされ」と出ているという。ここから「二乗は作仏せず」とも言われるのであろうが、それは二乗に停滞する者に対して言われることであって、二乗は作仏に至る大事な過程でなければならない。菩薩や仏の境地が何等の前提なしに起るはずはない。二乗の境地を経ないで菩薩に到達するような飛躍はあり得ない。また、小乗に停滞することによって仏教の真の発達を妨げる事例も起こったが、しかし、小乗的な厳しい基礎修行をと

もなわない大乗気取りが、仏教の今日の堕落を招来していることも見逃してはならない。

十法界は、以上に述べてきたように、三途、三善、三乗という三つの大次元の間における弁証法的発展関係と、さらに、三途においては地獄・餓鬼・畜生の、三善においては修羅・人間・天上の、三乗においては声聞・縁覚・菩薩の間にある弁証法的展開とを示したものである。したがって、十法界は、人倫関係の中に存在する複合弁証法的関係を示していると言い得るのである。

さて、私がここに着眼した理由を述べて筆をおくことにする。その第一の理由は十界に現われた「人間」の概念によって、ヘーゲルが立てた人倫(Sittlichkeit)の概念の現代における崩壊を立て直し得るであろうと考えたこと、第二の理由は、十法界で説くような複雑で多様な人間の存在状況一般を解明しなければ、教育の目標と政治の方針という今日の二つの重大問題を到底考え得ないと思ったからである。

(昭和四十七年十月二十一日)

ウィリアムブレェクと彼の二つの作品に就いて

近藤久美子

ウィリアム・ブレェク（一七五七～一八二七）は、まず、画家であり、そして詩人であり、哲学者であり、神秘主義者であった。ロンドンの小商人の息子として生れ、幼時から父親達の話の中に出てくる、イマヌユル・スエーデンボルグ（一六八八～一七七二）やジェーコブ・ボヒーム（一五七五～一六二四）の神に関する神秘的な話を夢中になって聴いているという風があった。スエーデンの哲学者であり、神学者であったエマヌエル・スエーデンボルグに依れば、イエス・キリストこそ、この世の唯一の神であり、聖書の中の言葉は、すべて精神的な、又象徴的な意味をもつものであり、それを、神がイエス・キリストを通して啓示したものであるという。ブレェクの生涯を貫ぬいて、彼に絶えず霊感を与えたもの、即ち、神の存在へのめざめ、認識という様なものは、父達のこういう話を聴いて居た頃から、幼少の時代にはっきり現われていた様である。ブレェクの時代、既に失われていたエリザベス朝時代の、神秘的な恍惚境を混じえた叙情詩特有の優雅さ、美しさを、彼は、自分の詩の中に表現している。

学校教育と言えば、絵の先生から受けた絵画手法上のものとか、彫刻の先生の所に弟子入りしていた頃に得たものしかなく、大部分はいわゆる創作的天才としての孤独な道を歩み、自学自習していたようである。

ブレェクはあらゆるものを、即ち、物の形、色彩、動きを自分の内心から湧き出る創作芸術家の目で捕え、会得したのであるが、同時に、こういう外面的なものを乗り越えて、その内なるものを読みとろう、会得しようと試みている。それ故、五官からくる具象の世界を象徴に充ちた一つの織物と見做したであろうし、その具象の世界を、隠喩の宝庫と考えたであろうと思われる。あらゆる物体、出来事の中に、それを超越して、抽象的な、超自然的な意味が指示されているとみなしていた様に思われる。

ブレェクの哲学をいみじくも表現している言葉の一つを借りて言ってみれば、

「一粒の砂の中に　全世界を観じ、
一茎の野の花に　神の姿をみる。
掌に　無限を把握し、
ひと時の中に　永遠を感ずる。」

"To see a world in a Grain of Sand,
And a Heaven in a Wild flower;
Hold Infinity in the palm of hand,
And Eternity in an hour."

多くの神秘主義の詩人がそうである様に、彼も亦、事象に対する己れの直観を表現すべき言葉がみつからず、大抵、彼の詩は荘厳で格調高いひとり言となって現われている。後期の作品が殊にそうである。それ故、当時の批評家は、彼の作品に対して、狂気の作と断じてしまっている傾向があった。彼の絵の作品に対しても同様であった。狂気の作品と見做してしまう方が、てっとり早く、楽な批判でもあったであろう。つまり狂気の作と看なさなければならないほど難解な作品であったとも言えよう。彼の思想はいつも天高く舞い上っている感じがしたのかもしれない。事実ブレェク夫人ですら、「私は主人とめったに語り合うなどという事もありません。主人はいつも天国に居るものですから」と言っている位で、常にブレェクの仕事を手伝っていた内助の功のあった夫人ですら、到底、ついて行けないと思わせる様な精神界にいつもいた様に思われる。

ブレェクが天と地でみるものは、普通の人の哲学が、到底夢にみる事も及ばない様な世界にあり、当時の批評家も含めて、ほんの僅かの人のみが、窺い知るに足る様なレベルに迄飛しょうしてしまっていたからであろう。しかも、若しブレェクがその天と地で見たものを語ったとしても、その話は、モーゼが神との約束の地を望んだ様に、ピスガの山から望んでいると思われる遠い遠い世界の事であったであろうから、普通の人には、彼が何を語っているのか判らないという結果になったであろう。

ブレェクは、自己の世界を表現するのに、二つの方法、つまり詩人として、画家として表現しており、この二つの表現に区別をつけていない。画作と詩作という二つの媒介物を通して、永遠なるものを表現する事に関心をもっていたと言ってよいと思う。とにかく、ブレェクという人は、画家の様に詩を書き、詩人の様に絵を描いた人であったと言ってよいと思う。

ブレェクは生前、人から余り認められず、死後も、その数十年間はめだたず一生を終ったという点で、世の多くのこの種の偉大な人々と同じ運命を辿ったといえるであろう。一世紀も経つと、然し同時代の人物中、最も勝れた、ユニークな作品を残した人として現われるに至っている。彼と同時代のウオーズウオス（一七七〇～一八五〇）やラム（一七七五～一八三四）やソーゼイ一七七四一八四三など、みなブレェクを狂人と考えていたと思われるふしがある。事実、ブレェクは、彼に対して、たまさか友情や理解を示そうとした人々をも、故意に驚かしてみたり、その人達をして、何となくわけが判らないという気持にさせたりする傾向があった様である。ブレェク自身受けてよいという当然の「認識」を得られなかった事に対して、ひどく不気嫌になっていた事も事実である。然し、それでいて、ある種の人気とりというものを極力回避していた事も彼の人柄から考えられる事である。

彼の晩年ある若い芸術家のグループがブレェクの作品を素晴らしいとみなし、ブレェクの下にはせ参じ、彼を中心にした芸術家の作品が花咲くかにみえた時期もあったが、ブレェクの死後、その影響力が失われると、跡かたもなく消えてしまったと云う事があった。この若い芸術家の仲間は、ブレェクの作品（絵画、主として銅版画、木版画）の中に何かしら彼らを

刺戟し、打つものを発見していたわけであろう。然し、それは、真似をして偉大なものに発展するという様な性質のものではないから、ブレェクから受ける個人的、直接的な影響がなくなってしまった後は、つまり、ブレェクの死後は、彼を凌ぎ、越えて行く芸術家は、その仲間からは現われなかったと考えられる。

ブレェクの絵には多くの要素、特質が含まれているが、それはブレェクの描いていた瞬間の気分に依っても違うし、又仕事をしていた環境に依っても違っていた。又、たまたま彼が抱いていた興味の対象に依っても違っていたし、或る問題を追求していた人生の時期に依っても違ったものを含んでいる。この事は、ブレェクの詩に就いても、同じ事が言えると思う。大切な事は、ブレェクが生涯停滞する事なく、常に新らしく、進歩発展して行ったと云う事実である。老年になっても勝れた作品を残している。それら老境に入った時代の作品は三十年前の若い時のものよりも、時には勝れたものを残しているという事実、この年と共に伸びて行く力、能力は驚嘆に価する。制作に臨んで、常に自分の信ずる所を恐れず表現していた事、人気とりや、欲得でいいかげんの妥協をする人ではなかったという事、そして、我々はその事にうたれる。

ある種のマンネリズムに陥る事が絶対にないと云う芸術家は存在しますまい。確に、ブレェクにも一種のマンネリズムがあり、ブレェクの作品を好まない人は、そのマンネリズムをきらう事であろう。然し別の見地から彼の作品に接する時、ブレェクのマンネリズムは、彼自身の独創性とか、疲れを知らぬ創造の一つの媒介物、彼の心奥の表現の媒介物となっているのだと云う事がわかる。いわば彼の心を伝える為の一つの象徴、手段と考えてよいと思われる。そして、ブレェクのシンボリズムの微妙さ、精妙さに驚かされる事であろう。絵を詩の様に、詩を絵の様に表現したブレェクの作品をよくよく味あうと、彼の幼稚に見えるシンリボリズムの向うに、非常に高度な、緊張した知性が見受けられる。

ブレェクは自分の文学的な観念を絵に表現したと言ってもよいと思われる。それ故、彼は風景画や、肖像画をめったに描く事はなかった。又、たとえ描いたとしてもそれらは失敗に終った事であろう。自然を写実的にうつすという事は、ブレェクにとっては時間の無駄の様なものであったであろう。例えばある詩人達の顔や頭を描くとしても、それを写実的に描くという事はしなかった。そうでなくてブレェクの心に表現される詩人の心像をキャンバスに記録するという態度で描いていたわけである。ある人を、その人物に似せて描くというより、その本質的なものを描こうとするのが、ブレェクの絵に対する態度であった。ブレェクにとって、文学的な、又、知的な意味をもたないものを描いたとしたら、その作品は不成功に約った に違いない。ブレェクにとってその対象が文学的な、知的な意味をもったもののみが、成功していたと言っても過言ではない。

少年時代から彼は二つのものへの讃美愛好を示していた。その一つはゴシック風のものへの讃美であり、もう一つはミケランジェロの作品の解倍学的に誇張されたものへの讃美愛好であり、この傾向は生涯変わる事がなかった。この二者からの影響力は相当根強いものがあり、この傾向がシンボリズムの形をとり、彼の作品の媒介物となって現われており、又ある意味では、彼の個性に限界を与えてしまったと考えられる。そして世の批評家は是を以って彼の作品の弱点ともみなした。又批評家のある者はブレェ

クの時代を超越した独創性を看破し得ず、その独創性を狂気とみなしてしまっている。その為生前も死後も相当永い間、ブレェクの作品は一顧にも価せざるが如く葬り去られていたわけである。

ブレェクは、殆んどその生涯をロンドンの裏街、うす汚ない、暗い裏街で過ごし、職人の様に働き、職人程度の収入で暮してきた人である。名声もうすく、唯ひたすら芸術の為に刻苦精励、働きずめに働き、いつも貧しく、孤独で、しかも心の中は歓喜に充ちて、七十年の生涯を人に知られる事もなく、ひたすら神、創造主への讃歌を楽しげにロずさんで昇天した。

当時の世人はブレェクを十八世紀の画家、詩人としては、消極的にしか関係づけなかったと考えられる。芸術家として、いずこにも所属せず、全く孤立して、時間と空間を超越して、世人の批評の規準を無視して、遙か離れた所で、孤独のままにこの世を去って行った人であった。ブレェクは当時の上品で気どった芸術文壇の世界の中に、燃えさかる火の玉が爆発した様な姿で現われたと言ってよいであろう。ブレェクの中には天才とも称すべき一つの神秘があり、これを説明しきれるものは当時存在せず、今後何世紀か経て、この世がもっと進んだ時、あるいは説明し得るものであるかもしれないし、又、永遠にときあかす事が出来ないものかもしれない。

ブレェクの作品の中にソングス・オヴ・イノセンスとソングス・オヴ・エキペリエンスがあり、しばしばその各々の中から「小羊」と「虎」がその対照として引用されるが、ここでは、前者の中の「煙突掃除人」と後者の中の「ロンドン」を紹介する。熊代荘歩氏の訳語をお借りすると、前者は「天真の歌」、後者は「知憂の歌」という事になるのであるが、天真も知憂も地上的なあり方であり、人間の表裏の様なものである点で同価値のものであるとする氏の説に同感である。一つの物象に対して、こうした両面を看るのが、ブレェクの特徴であると思う。なお「煙突掃除人」の詩はブレェクの「天真」にも「知憂」にもあるが、ロンドンに対応するものとして、「天真」からの「煙突掃除人」をとった。然し、この場合は対応するものと言うより、「ロンドン」の詩の一部の参照として、これを考えて頂く方がより適切であると考える。

The Chimney Sweeper

When my mother died I was very young
And my father sold me while yet my tongue
Could scarcely cry "weep! 'weep! 'weep! weep!"
So your chimneys I sweep, and in soot I sleep.

There's little Tom Dacre, who cried when his head,
That curled like a lamb's back, was shaved: so I said
"Hash, Tom! never mind it for when your head's bare
You know that the soot cannot spoil your white hair,"

And so he was quiet, and that very night,
As Tom was a-sleeping, he had such a sight!
That thousands of sweepers, Dick, Joe, Ned, and Jack,
Were all of them locked up in coffins of black.

And by came an Angel who had a bright key,
And he opened the coffins and set them all free:
Then down a green plain leaping, laughing, they run,

And wash in a river, and shine in the Sun.

Then naked and white, all their bags left bebind,
They rise upon clouds and sport in the wind;
And the Angel told Tom, if he'd be a good boy.
He'd have God for his father, and never want joy.

And so Tom awoke; and we rose in the dark.
And got with our bags and our brushes to work.
Though the morning was cold, Tom was happy and was in;
So if all do their dufy they need not fear barm.

London

I wander thro' each charter'd street,
Near where the charter'd Thames does flow,
And mark in every face I meet
Marks of weakness, marks of woe.

In every cry of every Man,
In every Infant's cry of fear,
In every voice, in every ban,
The mind-forg'd manacles I hear.

How the Chimney-sweepes's cry
Every black'ning church appals;
And the hapless soldier's sigh
Runs in blood down palace walls.

But most thro' midnight streets I hear
How the yourthful harlot's curse
Blasts the new-born infant's tear,
And blights with plagues the marriage hearse.

「ロンドン」の詩には少し説明が要るでしょう。まず "a ban" と言うのは、呪(ノロ)の言葉と考えて下さい。又、特に「勅許(チャーター)を得た」と詩の第一行と第二行に繰返し現われている事は威厳をよそおった大都市ロンドンと、そこに住む下層のしいたげられた人々の生活とを皮肉に対照づける為に、詩人が強調したと考えてよいと思います。ロンドン市は特に王室の勅許を頂いた独立した威厳ある別格の都市であったわけです。そこにテムズ川が流れ、その川添いに立派な寺院や王宮や公共の建物が立ち並んで威厳を添えています。詩人はその都市の裏街を歩いています。そこを歩く人間の顔に、あらゆる顔に、栄養の行き届かない、青白い体力の衰えた人間の姿、貧困に打ちひしがれた悲しみの表情を読みとります。それは勅許(チャーター)を頂いた街、勅許(チャーター)・ストリートを頂いたテムズにふさわしくない姿です。

あらゆる人間の、あらゆる叫び声に、恐怖に充ちた子供の叫び声に、あらゆる声、呪に、人間の心が造った手かせ足かせでかんじがらめにさせられた人間の姿を見る思いがすると詩人は言うのです。少年、身体が小さいが故に、煙突の中に入り煤だらけの空気を呼吸し、あげくは、若くして病に倒れる煙突掃除人となった少年達の労働の在り方が社会問題となっていたのですが、それが、あかるみに出て、そのいたいけな少年煙突掃除人(チムニー・スイーパー)の叫び声が教会を驚愕させ、あわてさせたこと、又ふしあわせな兵士の溜息

が宮殿の塀に血となって流れる。黒い教会（ブラックニング・チャーチ）とは煤煙で煤（すす）けた教会であり、同時に社会正義感にマヒし、堕落した教会をも意味する事でしょう。世論は然し、教会内でぬくぬくとしている牧師や僧侶を、あらためて驚愕させる事にもなってきていますし、又一方大英帝国の栄光の捨石となった下層の兵士達、傷病兵となって帰還した兵士達の生活への絶望の溜息は栄光の犠牲者たる兵士達が血を流して戦った、宮殿の塀に血となって流れるほどに戦って守ってきた、然し、その大英帝国の勝利も繁栄もこれら兵士達のものではなかったと言う事なのでしょう。

この威風堂々たる大ロンドンの真夜中の裏街で、夜な夜な若い売笑婦の呪いもきかれます。誰の子かもわからぬ、赤ん坊の叫び声と涙、自分の生んだ私生児に、何故この世に生れてきたのかと呪いの声をあびせる、生活苦に疲れ果てた売笑婦、結婚は墓場へと通ずるその結婚という柩を呪いと共に葬むる売笑婦の悲しみと呪い、それら、もろもろの悲痛な叫びを、詩人は夜な夜なきく思いがするという事なのでしょう。ブレェクの鋭い目は輝かしい威風堂々たるものの背後にあるものを見抜き、それをえぐり出しているのです。すさまじい詩です。

「煙突掃除人（チムニー・スイーパー）」の詩の方は、説明を要するほどの事はないと思います。そして、この詩は「小羊（ザ・ラム）」と「虎（ザ・タイガー）」の詩が天真と知憂のよい対照となっている様には、「ロンドン」に対照されるものではありませんが、「ロンドン」の詩の中に少年煙突掃除人の叫び声が腐敗堕落した教会を驚かす条（くだり）がありますので、それに関係づけて、この詩を載せてみたわけです。少年煙突掃除人という様な少年、子供の労働が当時の大きな社会問題となっていた事は、彼と同時代のチャールズ・ラムもその「エリヤの随筆」の中で書いています。

「ロンドン」の詩ではブレェクは恰（あた）かも、社会問題として是を取り上げている様な印象を与えます。然し、これと切り離して、「天真の歌」の方の「煙突掃除人」だけを読んだら、これが背後に、こんな大きな社会問題を含んでいるとは思えないほど、何となくひょうきんに詩作している様な印象を与えます。こうした面がブレェクの一つの特徴であると考えて下さってもよろしいわけです。ブレェクがこういう少年達に限りない愛と同情を注いでいる事もおわかりになるかと思います。かかる愛と同情なくしては、こういう詩を書く事もなかったと思うわけです。

William Blake (1757—1827)
Emanual Swedenborg (1688—1772)
Jacob Boheme (1575—1624)
William Wordsworth (1770—1850)
Charles Lamb (1775—1834)
Robert Southey (1774—1843)

Songs of Innocence (1783): "The Lamb"
Songs of Experience (1789): "The Tyger"
Essays of Elia (by C. Lamb)

Pisgah-sights: 死海北東の山、ピスガからの眺め。モーゼは死ぬ前に此処から神との約束の地をのぞみみたという。その神との約束の遠い前途に対するながめ、のぞみ、

The Woodlanders ノート

小林幹男

一

ハーディの小説の舞台となり背景となっているのは、彼が生れ育った South Wessex（今日の Dorsetshire）である。彼は生涯この地から外へは目を向けることなく、ひたすら沈潜しつづけて、この地方の自然とそこにいきづく人々の素朴な人情と生活とに愛情を傾け、そして南英のこの一地方を普遍的世界にまで高めたのであった。この地方に一歩足を踏み入れたら、一木一草にいたるまで、ハーディに関係しないものはないといわれるのも宜なるかな。この地方の田園の風物を、一木一草、とるにたらぬ小さな昆虫にいたるまで、彼はその類まれな筆致をもって、作品に密着させているのである。

Egdon Heath の創造において、場の統一と劇的構成の極致を示した The Return of the Native を一方の峰とし、後期の傑作として多くの人々の涙をさそった Tess of the D'urbervilles をもう一方の頂とするならば、森に住む人々の生活と人情の素朴を、その大自然との融合において描いた The Woodlanders は、さしづめそれらの裾野を結ぶ、それは文字通り、森林地というべきであろうか。

ハーディが書いた十四巻の長編小説の中でも、この作は特に生彩を放っていないとして見過されがちであって、彼の小説家としては創作上の休間期の作であるという人もあるほどで、いわば彼の長編小説群中の谷間的存在と看做されることを余儀なくされてきた感がある。

しかしながら、劇的な盛りあがりに欠けているという意見に真向から反駁するつもりはないけれど、その素朴な素材と地味ではあっても細やかな描写の中に Wessex 地方に独特な woodland の姿と、そこにひそやかに織りなされる森人たちの生活は、かえって余すところなく、ハーディの比類ない繊細な筆致によって詩の領域にまで高められていることは見逃がされまい。

But back in his own (Wessex) world, all his sagacity, his scholarship, his first-hand knowledge of place and people, of nature and the ineffable over-sprit of time and place, return to

inform his art. At its best, as in The Woodlanders, one of the most beautiful novels in English language, that art is almost criticism.(1)

と評される所謂もそこにあると思われる。

二

作品の舞台となっている woodland というのは、なだらかに起伏連続する downs や、けわしい尾根はあってもそれほど高くはならない hills、自然林や plantation を含む wood や forest などが層々と広がる所である。そこでは材木の伐採や枝編み細工、円材造り（spar-making）や苗木植え、林檎酒造りのような、季節の推移とともに自然の息衝にとけ込んだ人間の営みがある。ここに登場してくる woodland とは、きわめて人間くさい存在であって、それは決して人を拒絶する密林でもなく、深々として無人の幽林のような峻厳な趣はないのである。

The rambler who, for old association's sake, should trace the forsaken coach-road running almost in a meridional line from Bristol to the south shore of England, would find himself during the latter half of his journey in the vicinity of some extensive woodland, interspersed with apple-orchards..... At one place, on the skirts of Blackmoor Vale, where the bold brow of High-Stoy Hill is seen two or three miles ahead, the leaves lie so thick in autumn as to completely bury the track. The spot is lonely, and when the days are darkening the many gay charioteers now perished who have rolled along the way, the blistered soles that have trodden it, and the tears that have wetted it, return upon the mind of the loiterer.(2)

物語の冒頭の描写の中で、森林地は一種独特の寂寥感をたたえて巨大な一個の生物の様相を呈する。ハーディの自然描写の巧みさは、特に自然描写に始まる作品の中に最もよく発揮されている。

ここに描かれた自然は、作品の単なる背景の紹介という域を脱して、人物の性格や考え方やその行動に浸潤する力をもっているのである。

The Return of the Native の序曲に於いて、暮れなずむ広大な荒蕪地 Egdon Heath は、それ自体一個の生命を与えられ、幽暗の大気と夜の闇にころげ込んでゆく Egdon の荒野とが互に歩みよって、暗黒の闇の中にこそ、この荒野は自らの真情を吐露するものとして、又一つの有機的な生命のあらゆる複雑な可能性をそなえたものとしてとらえられたのであった。そしてそれと同じことを、ハーディはこの作においても行なっている。

yet where, from time to time, dramas of a grandeur and unity truely Sophoclean are enacted in the real, by virtue of the concentrated passions and closely-knit interdependence of the lives therein.(3)

この作品の舞台となっている woodland は、一個の巨大な生物となり、これは作品の単なる背景とか舞台の域を脱して、物語そのものの中にとけ込んで人物や事件と有機的な関連を保ちつつ、きわめて重要な役割を演ずることになるのである。

ただこの作品に見られる「自然」には The Return of the Native の

Egdon と Eustacia の間にみられるような、いわば人間との対抗意識の様相は見られないのである。

ここには、これまでの彼の作品の舞台を、人里離れた辺鄙な森林地帯に移し、そこでの四季を通して様々な風物・人情の機微が描かれているのである。「自然」は盲目的崇拝物としての姿をもって描かれてはいるけれど、The Return of the Native に於いて示したような、自然が人間の運命を破局へと追いやるあの怪物のような威圧感は、ここでは薄らいでいるといえるようである。

舞台は Egdon 荒野のあの重々しい圧迫感をもたらす憂うつな風貌とはうって変って、見晴かす緑樹海、わずかに見えるのは、窪地に沈んであたかも森林から切りとられたかに見える菜園や果樹園ばかりである。この土地では樹林の影響が人間の生活に及ぶことはあっても、それは Egdon がしたように険悪なものではなく、むしろ温和な詩的情調をもったものであった。

不吉な予感のこもった暗い悠久性というその本性から孤高森厳な圧迫感をひとに及ぼしつつ、御し難い反逆児的な非正統的な美しさの座としての Egdon[4] に代表される擬人化されたものとしての様相はうすく、従来の作品に現われたものとはかなりの相違があるように思われる。

On older trees still than these huge lobes fungi grew like lungs. Here, as everywhere, the Unifulfilled Intention, which makes life what it is, was as obvious as it could be among the depraved crowds of a city slum. The leaf was deformed, the curve was criplled, the traper was interrupted; the lichen ate the vigour of the stalk, and the ivy slowly strangled to death the promising sapling.[5]

Grace が父親と共に枝々の交差する緑の苔道を踏み落葉を踏んで進む時、周囲を緑の苔におおわれた枝の間の溜水が幹をつたって緑の滝をなす楡や樅の古木よりも更に年を経た古木には、肺葉の大きな茸が肺のように生え、ここにも他所と同様に、人生をかくあらしめている「果されざる意志」が、都会の貧民窟の退廃した群衆の中と同じように、明らかに認められたのであった。葉は奇形となり、その丸味はくずれ、その芯は断ち切られている。苔は幹の精気を食いつくし、蔦は有望な若木をじりじりと絞め殺していたのであった。

ハーディの作品にあっては、自然はむしろ暗く陰うつな姿を呈しており、彼の所謂盲目的宇宙意志の象徴の感をいだかせるものである。Egdon 荒野のもつあのけわしい姿こそその代表であった。そのような自然描写はハーディに於いてはしばしば見られ、一種の象徴的意義をもつものとなっている。

自然の取扱い方は作家によって様々だが、ハーディは、これまで述べてきたように、自然が人間と交感を保ち、調和し、影響しあって、悲惨な運命へと導くことから、自然が人間を翻弄するという描き方をしている。そしてそれはハーディの自然観の基調をなしているといえるようである。

But nature provides more than a more background: often it is a protagonist in the story, an unfeeling, impersonal force exerting its influence upon the lives of the character. Probably the finest examples of Hardy's use of nature are in The Woodlanders

and in The Return of the Native.(6)

ただ、ハーディはこの作品の中でも、人間と自然との完全な融合の姿を示したけれど、両者は精神的交感を保っていて、その混沌たる人間と自然との交りの中に、自然も人間と同様に生の苦しみに喘ぐものであり、共に宇宙の法則に従わざるを得ない受難者の姿を呈していると見ることが出来るであろう。これは従来の作品中に描かれた自然とはいささか様相を異にするものと思われるのである。

III

この作品の欠点は、集中性の欠如にあると言われてきた。作品を読過して感じられることは、一体主人公は誰なのかということである。ある時は Giles と映り、また Marty と思われ、かといって Grace に意識のうつろうこともあり、興味の焦点は常に流動してやまず、個々の人物はとかくぼやけがちである。このことから、集中性に欠けているとか、plat が散漫であると見られることになるようである。

この問題をおうまえに、ここで主として物語の進展の中に織りなされる人物の相互関係に少々ふれておく必要があるであろう。

森の娘、純朴そのものでこの森に長く住みついた精霊の如き存在の Marty は、やはり同様に純情素朴な樵夫 Giles を終始慕いつづけているが、その Giles には Grace（父親で木材商のが村のどの娘にも及ばぬほどに教育を受けさせ洗錬したのだったが）という許婚者がある。この Grase は、森林地の人々の地味で質朴な気風とは全く異質の、理知的でありながら、浮気で無責任で小才にたけた医者 Dr. Fitzpiers に結局心を引かれてゆくが、当の Fitzpiers は未亡人で地主の Mrs. Charmond に心を寄せ、また木挽の息子の許婚者 Suke をも愛している。そしてこのような複雑な愛欲の葛藤と人物相互の紛糾に解決への糸をひくのが Grace の父親 Mr. Medbury である。

はじめ成就するかのように思われた Grace と Giles の結婚は、父親の変心と Grace 自身の優柔不断な性格と多情で無責任な Dr. Fitzpiers と Mrs. Charmond の出現で成立しない。Grace は都会で受けた教養とこの故郷の森林の原始への共感との板ばさみに悩むけれど、父親の希望—変心—高い教養と気品を身につけた娘はそれにふさわしい所へ嫁がせるのが最良という—と勧めによって、結局 Dr. Fitzpiers と結婚するが、彼に裏切られ、やがて顧みられなくなる。そのうち Giles も病を得て死ぬ。Dr. Fitzpiers と駈落ちした Mrs. Chamond も以前の情夫の手で殺されるという事件によって、Fitzpiers は Grace のもとに帰り再出発する。

対立が行動を生み、行動が事件を呼んで、やがてクライマックスに至るという、あの物語の一つの典型を期待する読者は、ここでは大きな不満を覚え、impatience を感じるにちがいない。物語は全体としては緊迫感に欠け、迫真さに欠けていると見えるだろう。

けれども、Mr. Melburg が Giles の父親の死に対して誓った彼の良心上の理由によって、娘の Grace が生れると同時に、Giles のもとへやろうと決意し、誓いもしたが、娘の立派に成長した姿を見て心が変り、彼女を Fitzpiers に嫁がせる。だがまもなく Grace が夫 Fitzpiers にすてられたことを知ると、以前の誓いが後悔のうずきとなって、彼女を再び純朴でしかも彼女に誠実に愛情をささげつくしている Giles に近づけようと

思うのであるが、こうした Melburg の娘の幸福を願っての心の動き、心情というものが、作品の大部分を漂っていることも留意すべきである。作品の雰囲気を構成する要因の一つとなっていると思うからである。

また物語の劇的もりあがりの場面の一つ、

'Now, my own,own, love,' she whispered, 'you are mine, and only mine; for she has forgot 'ee at last, although for her you died. But I — whenever I got up I'll think of 'ee again. Whenever I plant the young larches I'll think that none can plant as you planted; and whenever I split a gad, and whenever I turn the cider wring, I'll say none could do it like you. If ever I forget your name let me forget home and heaven!..... But no, no, my love, I never can forget 'ee; for you was a good man, and did good things!'(7)

物語が終局に至って、Giles の死が待っている。この Giles が病に勝てずついに自然に帰った時の、Marty の独白の場面にも、一つの大きな高まりが見られる。こうしたことから、必ずしも物語が散漫に終始し緊迫感に欠けているとは言いがたいようである。

We wake, after the death of Giles Winterbourne, and the final valediction of his love Marty South, with a start of incredulity not at the story, but at the world around us, and of our own affairs.(8)

ここでわれわれは、一つの問題を考えなければならなくなった。それは作者ハーディの人物の扱い方である。

Grace への愛を誠実に守りぬき、Fitzpiers をして騎士的人物と羨望させた樵人 Giles と、理知的だが、小才のきく軽薄な（そしてそれが無邪気に滑稽にさえ見えるのだが）Dr. Fitzpiers との間を優柔不断に揺れ動く木材商の娘 Grace と、結局彼女と妙な和解に到る Dr. Fitzpiers にはかなりの紙数をついやして描写されている。それに反して、純真無垢で、哀れを誘いさえする森の娘 Marty は初章と終章に登場するのみである。従って描写に捧げられている紙数からは、Marty の存在はうすれがちである。

それにもかかわらず、Marty の映像がわれわれの心にいつまでも残る、否、心にその鮮明さを増してくるというのは、Marty が一時的な付けたしではなく、単に作品の構成上の装飾ではなく、もっと重要な存在となっているからである。

As this solitary and silent girl stood there in the moonlight, a straight slim figure, clothed in a plaitless gown, the contours of womanhood so undeveloped as so be scarcely perceptible in her, the marks of poverty and toil effaced by the misty hour, she touched sublimity at points, and looked almost like a being who had rejected with indifference the attribute of sex for the loftier quality of abstract humanism.(9)

これは物語の終りちかく、作者ハーディが Marty の存在を最も明確に描いた部分である。この描写から Marty はいく分現実味を失ない、霊的な存在としての印象を受けるけれど、そこにハーディのねらいがあったように思われる。

幼い頃の Grace の婚約者であり、常に彼女への愛情を貫きとおす騎士として振舞い、森林地の秋の精（Autumn's very brother）と見える Giles も大きくクローズアップされてよい。そして更に Grace も Dr. Fitzpiers も Mrs. Charmond も、森林地をおおう The Unfulfilled Intention の影響下におかれていることもつけ加えなければならないであろう。

この問題について結論を急がねばならないとするならば、この作品の焦点は woodland そのものであり（主人公は woodland と見るべきで）、この woodland と Marty とは確実に呼応し、Marty は、その描写の量を越えて、主役としての役割を十分に果していると思うのである。

注

（1）Church, R: The Growth of the English Novel. p. 158
（2）The Woodlanders. p. 1
（3）The Woodlanders. p. 5
（4）大沢衛著「ハーディ文学の研究」
（5）The Woodlanders. p. 62
（6）Albert, E: A History of English Literature.
（7）The Woodlanders. p. 460
（8）Church, R: The Growth of the English Novel. p. 158
（9）The Woodlanders. p. 459

慧皎における亡身の意味について

岡本天晴

いわゆる「捨身」は、「焼身」、「遺身」、「亡身」ともいわれ、法華経の薬王菩薩本事品や金光明経の捨身品や大般涅槃経の聖行品、或は、大智度論巻第十一等に説かれている。それによると、捨身は、身を捨てて仏等を供養し、又は身肉等を衆生に恵施する烈行であり、布施の一種ではあるが、その方法が、身命を惜まない烈行や苦行である点にその特色があるといえよう。

さてシナ仏教においては、劉宋以後盛んに捨身が行われたことは、諸種の僧伝によって知られる所である。梁の高僧伝第十二亡身篇には、僧郡以下十一人の亡身がみえており、それらはいずれも諸経典に説く捨身をそのまま実践にうつしたと思われる如き烈行や苦行ばかりである。しかし、高僧伝の編者の慧皎は同亡身篇の最後に、僧群以下の亡身の得失について、

考而為レ談有レ得有失。得在レ忘レ身。失在レ違レ戒。(1)

の如く論じている。則ち、慧皎によれば、「失は戒に違う」という点にあり、得は「忘身」つまり「身を忘れる」という点にあると述べている。或は、又同亡身篇に、

僧群心為二一鴨一而絶レ水以亡レ身。僧富止救二一童一而割レ腹以全レ命。法進割レ肉以啖レ人。曇称自餧二於災虎一。斯皆尚二乎兼済之道一。忘レ我利レ物者也。(2)

と見える如く、亡身を行じた僧群や僧富や法進等が「兼済の道尚び、我を忘れて物を利する者」であるといい、ここでもやはり、捨身の「忘レ身ヲ」点に高い価値をみているようである。したがって慧皎は、身を捨てて仏を供養すること自体よりも、これら僧群等の、身を捨てる時の態度、或は心理的な面である「忘身」を高く評価しているといえよう。一般に、法華経等の大乗仏典では、捨身は身命を惜まずに捨てるというはげしい宗教的行為であり、「諸の施の中に於て最上なり」といわれ、最も尊い菩薩行と考えられているのであるから、単に「忘レ身ヲ」こととは決して同一のことがらではない。したがって、慧皎の亡身篇の以上のような論は、「忘レ身」を高く評価する点に於て特色があるといえるようである。しかし、慧皎におけるこの特色には、慧皎以前の「亡身」に対する思想的背景があると考えられるであろう。そこで、シナで亡身が実践されてくる劉宋以前に於て、「亡身」がどのように考えられていたか、何如なる意味をもっていたかを

考えてみたい。

「亡身」に関しては、東晋時代において、すでに論じられている。すなわち、何充の「奏沙門不応盡敬」に、

今、沙門之慎戒専専然、及為其禮二而已矣。至於守戒之篤一者、亡身否乎。(3)

といい、ここに「亡身」が述べられている。この資料は、庾冰の「且つ五戒の小善は、粗人倫擬似す。而も更に世主に於て其の礼敬を略せんや」という五戒を以って人倫を廃するを非とする論難に答えたものである。ここで何充のいう「亡身」が、具体的に何を意味するかは、はっきりとは分らないが、戒律に厳にして、かつ礼の本質を体している沙門によって、「亡身」がなされるようである。したがって、何充のいう「亡身」は、仏教の戒の立場からも、儒教の礼の立場からも肯定されるものと見ることができよう。以上のような点を考慮しつつ、同じく、何充の「重表」をみると、

六戒之禁実助王化。賤昭昭之名行、貴冥冥之潜操、行徳在於忘身、抱一心之清妙。(4)

といい、沙門の戒を守る点が、王化を助け、退譲の徳が高いことを述べている。ここでは、戒と礼に関連して、「忘身」がいわれている。何充のこれら二つの資料の内容は、ほぼ同じであり、又、「亡身」も「忘身」も戒と礼に関連して述べられている点から考えると、この「亡身」と「忘身」は、意味内容に、共通性があるといえるのではないかと思われる。しからば、東晋の頃における「忘身」の意味が判ぜられれば、自ら「亡身」の意味も分ってくると考えられる。

そこで次に、シナ思想や僧伝等にもとづいて、「忘身」について考えてみる。

「荘子」内篇人間世に、

為人臣子者、固有所不得已、行事之情而忘其身。

とあり、自分ではどうにもならない点は、尽くすべき道を尽くして、わが身を度外におくといい、「忘身」が、道家の価値的概念であることが知られる。

一方、シナ仏教に於ても、「忘身」の語が多く用いられておる。例えば、牟子理惑に、

列士忘身……(5)

とか、梁高僧伝巻第一の摂摩騰伝に、

乃誓以忘身、躬往和勤。(6)

とか、前同曇摩難提伝に、

慕法情深、忘身為道。(7)

といい、同じく梁伝巻四の竺法乗伝に、

乗、後西到燉煌、立寺、延学、忘身為道。(8)

とみえており、いずれも、これら沙門の精進努力の行を評して、「忘身」といい、高い価値的概念として用いられていることがしられる。出三蔵記集序巻七の王僧孺撰の慧印三昧及済方等学二経序讃第十六に、

損已利人、忘我済物。(9)

とみえ、ここでいう「忘我」は前述の「忘身」と同じ意味であろう。また、梁伝巻四の干法蘭伝に、孫綽の道賢論を引いて、

蘭公遺身高尚妙迹。(10)

といい、この「遺身」も「忘身」の意味であろう。

さて、それでは、以上のように、シナ仏教で価値的概念として用いられた「忘ㇾ身」が、何故「亡身」と結びついたかといえば、その理由の一つは、「説文通訓定声」に、「亡は叚借して忘と為す」とある如く、「亡」が「忘」に通じているためと思われる。

以上から考えると、シナ的意味での「忘ㇾ身」がシナ仏教に於ても用いられ、東晋の、何充の論に於ては、先にみた如く、「亡身」が「忘ㇾ身」と一部には意味が共通して使われていることが知られる。このように考えると、慧皎の高僧伝第十二に僧群以下の捨身僧十一人を集めて、特にその「忘ㇾ身ヲ」点を評価して、編名を「亡身篇」とした理由がよく説明されるであろう。すなわち、捨身の「亡身」と、我を忘れるという意味の「亡身」は、一般には全く異なる概念であるにもかかわらず、この両者は、東晋の頃から、同じ意味で使われていたので、特に捨身に関して、「忘身」を高く評価する慧皎が、「捨身」と「忘身」の両方の意味を表現出来る言葉として、「亡身」を篇名として用いたのであろう。

このようなことは、続高僧伝第二十七、或は、宋高僧伝第二十七の篇名についてもいえるのである。すなわち、両伝には、「遺身篇」がみえているが、この「遺身」は、単に捨身を意味するのではなく、前述した如く、「身を遺(わす)れる」意味もあるのであろう。また慧皎の「亡身」について、以上の如く考えなければ、元・明の大蔵経で高僧伝の同篇名を「忘身」と作っている理由も説明出出ないであろうと思われる。以上、慧皎の「亡身」の意味を論じたが、シナ仏教に於ける「忘身」については次の機会に考察したい。

註

(1) 大正五〇、四〇六、上。
(2) 前同。
(3) 弘明集巻第十二、大正五二、八〇、上、中。
(4) 前同、大正五二、七九、下。
(5) 前同巻第一、大正五二、一、中。
(6) 高僧伝巻第一、大正五〇、三二二、下。
(7) 前同、大正同、三二八、中。
(8) 前回大正同、三四七、下。
(9) 出三蔵記集、大正五五、五〇、中。
(10) 高僧伝巻第四、大正五〇、三五〇、上。

Typewriting 教育法の研究　その2

—— Typewriting 教育の展開 ——

井　口　美　登　利

1. Typewriting 教育の発達
1. 1. Two-finger Typewriting
1. 2. Touch Typewriting (All-finger Method)
1. 3. Typewriting 教育法の問題点
1. 4. Keyboard の習得と練習の順序
1. 5. Skill Building

2. Typewriting Textbook の変遷
2. 1. 第1期 (1880～1889) Sight Method の時代
2. 2. 第2期 (1890～1900) Touch Method の導入
2. 3. 第3期 (1901～1929) Programmed Textbook の発展
2. 4. 第4期 (1930～　) 専門化と多様化の傾向

3. あとがき

1. Typewriting 教育の発達

1. 1. Two-finger Typewriting

実用化された最初の Typewriter を Christophoer L. Sholes に帰するならば，その出現は1868年，あたかも我が国の明治元年にあたるのである。そしてまた，“Typewriter”という用語も，このとき初めて使われたのであった。

最初の正式な Typewriting 教育，すなわち学校における正規の授業としての Typewriting が発足したのは，その後10年を経た年のことであり，所は New York 市の Packard School であったとされている。これにはまた，同市の Scott Browne School とする異説もあるが，年代は共通する。）この年は，我が国の明治10年にあたるから，西郷隆盛が鹿児島で兵を挙げた，いわゆる西南の役のころのことである。

ようやく学校教育に採用された Typewriting の教科が，どのような内容のものであったかは明らかでないが，右手左手ともに2本づつの指を使った幼稚なものであり，教育法としても，単なる試行錯誤的な練習の反復を出ることはなかったであろう。

Typewriter の Keyboard が，ほぼ現在のものと同様な配列に改められたのは，1872年のことであり，この時までに4年を経過しているから，当然この新 Keyboard による教育が行われたにちがいない。しかしながら，それまで Capital letter しか打てなかった構造の Typwriter か

ら，Small leter をも打つことができるような機械への開発が行われたのは1878年のことである。その同じ年 New York 市の学校にはじめて採用された Typewriting が，当時としては画期的であり最新型の Typewriter（すなわち Remington Model 4）をいち早く導入したかどうかは，すこぶる疑わしいのであって，Capital letter のみの教材に拠ったものと思われる。

1. 2. Touch Typewriting (All-finger Method)

Typwriter の普及と，機械的構造の改良が進むにつれ，Typewriting の技術についても新しい試みが行われてきた。その中で，もっとも著しいものは，いわゆる Touch Typewriting であり，その影響するところは大きく，Typewriting の教育法においても，やがて主流的な位置を占めるようになるのである。

両手のすべての指（厳密に言えば左手の拇指を除く）を使い，そこに目をやることなしにKeyを打つという Touch Typewriting の可能であることを提唱したのは，Salt Lake City, Utah の Frank McGurrin および Cincinnati, Ohio の Mrs. L. U. Longley の技法を習得したのも1978年であったが，彼はその後久しく多くの挑戦者を退けて，第一人者としての腕前えを誇ったのである。

Touch Typewriting あるいは，すくなくともその All-finger Method に注目した人たちの中には，Portland, Maine の W. E. Hickox ののような進歩的な教育者たちのほかに例えば Remington Typewriter Company の H. V. Rowell をはじめとする業界関係の人々があったことは不思議ではない。Rowell は 1884 年 Harrisburg, Pennsylvania で開かれた国際速記者協会 (International Association of Shorthand Writers) の第 4 回大会で，Mrs. Longley の提唱した Touch typewrting の利点を紹介したことは大きな反響を呼んだ。やがて Springfield, Massachusetts の B. J. Griffin と Portland, Maine の Bates Torrey の二人がそれぞれの勤務する学校で，Touch Method による Typewriting 教育の実験を行い，この方法の優秀性を立証したのである。この結果に力を得た Bates Torrey は 1889 年，最初の All-finger による Typewriting の指導用教科書 "A Mannual of Practical Typewriting" を出版したが，その中で，この新しい技法を "Touch" System と呼んだのであった。こうして Touch Method による教育が開始されたのは，学校教育に Typewriting が採用されてから，そしてまた Frank McGurrin がはじめてこの方法を試みてから，いずれも11年の後に当っている。Torrey の教科書は，たちまち東部地方に普及し，それとともに Touch Method の評価も定まった。

Touch Typewriting による教育を中西部に広めるのに貢献したのは，Remington 社の Q. P. Judd であった。同社の Omaha, Nebraska 支店長であった彼は，A. C. Van Sant と F. W. Mosher を説得して，両名の関係する学校でこの System を採用させることに成功したが，予想以上の効果に満足した Van Sant は，1900年全米商業科教師連盟 (National Commercial Teachers Federation) において Touch Typewriting の利点を発表したことから再び注目を集め，ほどなくこの System が全国を席捲するようになるのである。

1. 3. Typewriting 教育法の問題点

4本の指による Sight Typewriting から，8本の指（Space Bar を打つ右手の拇指を加えると9本の指）による Touch Typewriting と，その技法には飛躍的な前進があり，また Typewriter の Mechanism にも長足の改良が加えられた20世紀の初頭にあっても，その教育法という点に至ると，まだ大した発展は見られなかった。学生はそれぞれ教室に入り Typewriter にむかって個別に練習する教師の仕事は学生の打った Paper を Check するだけであった。組織的な Group study の System を導入しようとする考えは，1905年ごろから唱えられてはいたが，それが陽の目を見たのは1916年のことであって，第一次世界大戦にあたり，大量の熟練した Typist の需要が生じた際であった。こうして時代の要求に従い，同一の教材により大人数の学生を一斉に指導する Typewriting 教室が創められたのである。結果はしかしながら，芳しいものではなかった。この教室の指導に当った者の大部分が古手の実務家—Typewriting や Shorthandの経験者であっておよそ教育理念や教育法に対する関心は薄く教育・指導力に欠けることが多かったというのがその原因の大半であったと言えよう。そして，その後小学校関係を主とする教員がこれに代るようになっても，混乱は止むことがなかった。彼等には教育知識はあるものの，いわば新しい技術である Typewriting の Technic について，充分な能力に乏しい場合が多かったからである。

このように Typewriting 教育には，その拡張期にあたり適当な人材を得ることが困難な事情にあったけれども，1900年ごろを転機として，とにかくも組織的 Approach への方向に道を取ることとなったと言えよう。

そしてその内容は，先ず Keyboard の効率的な習得のための練習方法に向けられたが，その学習にはいろいろな方法のあることが明らかとなり，やがて Typewriting Posture を主とする正しい習慣の養成が，こうした方法に共通あるいは優先することも知られてきた。

次いで，Typewriting の Speed と Accuracy を中心とする Skill Building の問題に関心が集中するのも当然の成り行きであったろうし，最後には Production Practic さらには Office Clerical / Secretarial Work への応用を主要な目的とする，いわゆる Programmed Study の system へと発展することになるのである。

1. 4. Keyboard の習得と練習の順序

Typewriting の第一歩である Keyboard の習得は，特定の指に特定の Key を結びつけるという“記憶”の問題として捉えられたことから，心理的な学習と記憶の理論が当然のように応用された。1900年から1930年にかけて，多くの調査・実験・理論・方法が提示されてきた。その中で一般的となったのは Typewriting Posture と関連させながら，左手小指の a と右手小指の ; を Home Key として，その位置を全体的に記憶させようとする方法であった。1910年に始まったこの方法は，やがて Home Row—左手小指の a. s. d. f. 右手小指の j. k. l. ;—の記憶を強調するという方法に発展して，今日に及んでいる。（現在では Home-Row Key をふくめて，Home Key と呼ぶことの方が普通である。

1920年頃までには Keyboard に対する指の分担は標準化されるようになったが，Typewriter の Mechanism の方からも，できるだけ人間の手の構造に合わせて，もっとも無理のない位置に，

もっとも容易に操作できるように Key を配置するという，いわゆる “Human Engineering” の発想に基づく努力が行われている。その場合に前提となるのが Corrct Typewriting Posture であり，Good Typewriting Habit であることは言うまでもなく，Home Key（ないしは Home Row）Method は，特定の指と特定の Key との単なる Mental な記憶づけだけに止まらず，実際に Typewriter を使用して，Posture や Habit との連関のもとに総合的，全体的な身体の位置および運動の記憶あるいは学習を意図したものであって，さればこそ，効果的な方法として定着したものと言えよう。

その限りでは学校教育における普通科目の学習指導とはいささかその趣きを異にしており，むしろ音楽教育における器楽，特にその性質上鍵盤楽器の練習に近いものがあるであろう，しかも学校における Typewriting 教育にあっては相当多数の人数を一斉に指導するという要求がこれに加わるのである。

右手の拇指で Space Bar を打ち，左手の拇指は用いないこととなったのも，Universal Keyboard におけるそれぞれの指の Frequency の調査が進み，右手に対して左手の負担が著しく大きいことが判明したからであり多少なりとも左手にかかる重荷を減らすための方法として採られたものであって，これもまた1920年までにはつとに確認されたことなのである。（もっとも我が国では，1910年代に終りを告げたはずの，左手で Space Bar を打つやり方や，同じく1920年以前の混乱期に一部で採用されていた指の分担を，そのままに踏襲しているといったような恐るべき Typewriting 教則本なるものをいまだに見かけることがあるのである。）

Home Row の Key を練習した後，どのような順序でその他の Key の練習に入るか，あるいは Word さらには Sentence の練習をいかなる時期より加えるかといった問題については，早くも1920年における Mrs. Ida M. Cutler のいわゆる “First-Finger-First” Approach に始まり，その後多くの方法が提示されているが，その性質上，Keyboard の配列や，Key に対する指の分担のように一定の方法に統一されたり標準化されることはなかった。

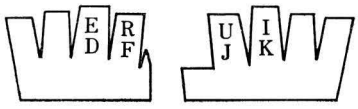
現代における代表的な System の基本的な考え方は次の通りである 人さし指・中指のような一般に強くて自由に利く指で，もっとも打ちやすい Position の Key を打つ練習からはじめる，そしてその間に正しい Typewriting Posture と良い Typewriting Habit を身につけることに努める。この限られた指と Key との記憶ができ上った段階で，word の練習を加える。もっともこの場合，master した Key が例えば僅かに d. e. f. r. j. u. k. i の 8 個に過ぎないとしたら，この Letter Combination による Word の組み立てには限度があるが工夫すれば，これだけの Key からだけでも Sentence（Capitalization と Punctuation を除いて）の練習に入ることもできるのである。このように場合によっては練習の初日からさえも Keep Eyes on Copy による “Touch Typwriting” を体験することが可能なような Programming は，たしかに魅力的である。

HOUR 1

YOU TYPE A SIMPLE SENTENCE!

- Strike Keys Sharply!
- Don't Worry about Errors!

• Don't Strike over Errors!



deed did free deer　freed deer did feed
deer did ride free　rider did ride free
duke did deed dike　jeerer did jeer duke

こうした Program が真にその効果を発揮するためには，有効にして熱意ある教師による教室での学習が一番であろうし，Self-taught による Individual な学習でこれに近い収獲をあげるためには，学生自身の素資と努力とにかかるところが極めて大きいのである。

母国語ならぬ外国語の英語で読み・書かねばならぬという本質的な Handicap をになう我が国の Typewriting 教育においては，それに加えて，ある程度の年齢に達してから集中的に，しかも短期間に，まったくの初歩からの練習を実施しなければならぬという条件を抱いている。それだけに，Keyboard の Mastering というその第一歩から合理的（すくなくとも合目的性のある）および効果的な学習 Program と適切な指導に支えられた Typewriting 教育法の必要性はなによりも増して大きいと言わねばなるまい。

教育的に言えば，こうした Program ないしは Programmed Material に取り組んで行くにあたって，指導する教師はもちろんのことであるが，学習する学生のひとりひとりが現在やっている Course の目的を理解し，意識を持って努力し努力させることである。当然のように，こうした練習には高度の精神集中を必要とするから，練習時間の配分には周到な配慮が払われなければならぬ。肉体的・精神的な疲労曲線と，例えば練習時間を予告した場合の当初努力・終末努力によるその変化をはじめ，多くの教育心理学的な知識を有効に応用するべきであろうし，結果が直ちに表われるという Typewriting の特性を生かすならば，Group Study の利点のひとつである競争心による刺戟などは，使い方によっては大いに役立てることができようというものである。

1. 5. Skill Building

Keyboard の Mastering に続いて行われる練習の目標は，Typewriter の操作に対する一層の習熟を通じて Typewritig における Speed と Accuracy を増加させることに向けられる。Touch Method が一般化する以前，すなわち1880年から1900年にかけては，Four-Finger System による Sight Typewriting と Eight-Finger System による Toch Typewriting のいずれが，速度と正確度の両面において，有利であるかという論争があった。この問題が後者の決定的勝利に終ったことは，さきに述べた通りであるが，今世紀に入ると Typewriter の機械的性能も著しく向上してきたことから，Typewriting Speed の可能性と期待度は大幅に引き上げられることとなった。こうした時期に登場したのは皮肉にも，正確度優先を主張する練習方法—Accuracy Approach であった。

Accuracy Approach の理論は，1909年から1919年にわたる10年間，熱心に提唱されたのであ

るが，Keyboard の Mastering に続く word や Sentence 練習の段階から，なによりも正確度を強調し，学生には常に Perfect Copy を要求する。こうした練習を重ねることにより，正確度を保ちながらやがて速度の方も進歩してくるはずだと言うのである。しかしながら，目標がきわめて低い次元の Speed である場合を除き，社会が要求し学校が計画するような Typewriting Speed は，こうした理論による練習方法からは容易に達成することができなかった。すなわち，相当以上の Speed は，決して Accuracy 中心の練習の副産物として得られることがなかったのである。従ってある時期以後からは学習効果は練習時間に比例しなくなり停滞するようになる。Typewriting 教育担当者の中で短期間に Speed の増加を可能とするような新しい方法に対する関心が高まってきたのは当然の帰結であった。

新しい方法の第1歩は Perfect-Copy 優先の考え方を捨て去ることであり，いわば，Speed 優先ともいうべき，それにかわる新しい養成には単なる練習の反復だけでなく，集中的な努力が必要であり，それは個人の能力と態度にかかるというのでは，Sight Method もしくはそれ以前への逆行になりかねない。究極的には Techniques-Speed Approach として，今日もなお，すくなくとも理論的には，承認されている Speed Typewriting の方法論は，Keyboard Mastering の場合とは，Typewriting Posture の分析をその基礎としている。

30wpm (=30 words per minute) の Typewriting のために必要な Posture は，30 wpm には充分であっても，例えば 50 wpm の Typewriting を目指す場合には不充分である。50 wpm のために必要な高次の Typewiting Posture は，現在一応安定しており，従って Error のない 30 wpm のための Postureを崩さぬ限り，容易には到達できない。新しい posture を習得するまでの過渡的な期間には，とにかく Speed を優先に，ともかく目標とする Gross Strokes を打つことを目指す。Error はその後に，Posture の矯正を通じて減少させるというのである。これには Error の分析と顕在あるいは潜在するその原因の診断，症状および原因に対する適切な総合的対策の指示とその実行の監督および経過の観察——そして必要ならば，その結果生じるかも知れぬ第二次的な Error あるいは Posture の問題に対する診断と対策という裏付けが必要であり，そのための能力と熱意を備えた教師の存在を前提とするのであるが，教育，すくなくとも学校教育においては，こうしたことがらはむしろ当然行わるべきものであろうから，Typewriting といえどもその例外ではあり得ないというに過ぎないのである。

母国語ならぬ外国語を扱うという根本的な制約に加えて，しかも授業時間数においても著しく限定されている我国の Typewriting 教育の現状にあっては，合理的な練習方法と適格な指導者の必要性のなによりも大きなことは，さきに述べた通りであるが，Speed Typewriting における Skill Building の段階は，その最も典型的な場合と云うことができよう。

2. Typewriting Textbook の変遷

2. 1. 第1期 (1880～1889) Sight Method の時代

Typewriting 教育のための Textbook の変遷は，当然のように，Typewriting 自身および，その教育法における方法論の発展段階とその歩を共にするが，年代的には，1880年より1889年ま

での10年間を，その第1期と考えてよかろう。Textbook としての体裁を備えた最初のものは，Edward F. Underhill による Handbook of Instruction for the Type Writer であって，その出版は1880年—我国の明治13年—に行われているから，学校教育に Typewriting が採り入れられてから2年後のこととなる。それ以後10年の間に27冊の Textbook が次々に出版されているが，Typewriting における基本的な方法はいずれも Sight Method によるものであったから，Keyboard Control に初まる基礎練習の Program をどのように計画するかという問題は結果的に大した意義を持たなかったと言えよう。そして当時の熟練した Typist たちは，Typewriting 教育の担当者をも含めて，もっぱらその技術を「自得」した人たちであり，理論的ないしは組織的な練習を自ら経験したことがほとんどなかったであろう。ぼう大な練習量に支えられ，長期間にわたる試行錯誤の結果，ようやくにして達成される高度 Typewriting 技術は，個人の努力によるべきものとされたわけである。

2. 2. 第2期（1890～1900）Touch Method の導入

従来の Four-finger による Sight Method Typewriting に対して all-finger の Touch Method Typewriting がその決定的な優越性を実証したのは1888年のことであった。これより10年前，すでに 90 word-a-minute の記録を樹立していた Touch Method の Champion, Frank McGurrin と，Sight Method の代表 Louis Traub との間に Contest がこの年に行われたのである。(Traub は Capital と Small Letter を分離した Double-Keyboard の Typewriter, Caligraph を使用しているが，この機械の Mechanism は Sight Method を前提としたものであった。)

結果は次表に示すようにまさに決定的であった。

	Straight Copy	Dictation
McGurrin	96.5 wpm	93.5 wpm
Traub	63 wpm	77 wpm

当然のように Touch Typewriting に対する評価は急激に高まったが，翌年1890年には Touch Method を強調した Textbook が出版された。さきに挙げた Bates Torry の A Manual of Practical Typewriting がそれである。

Mrs. M. V. Longley は，これに先立って，1882年に All-Finger による新しい Typewriting Method の構想を Type-Writer Lessons として発表しているが具体的な Textbook として実現されたのは1890年代に入ってからのことであった。ここに第2期として挙げた1890年～1900年には，Touch Method による多くの Textbook が出版されているがその大部分は，Typist, Clerk, Secretary 等の養成を目的とする，いわゆる Business College において，自校の学生に対する授業に使用するために作製されたものであり，従って一般に広く市販されることは少かったのである。その著者もまた，そうした学校の教師，あるいは Mrs. Longley がそうであったように，その経営者に限られていたと言ってよい。使用の対象が限られていることから，教科書としての緊密な構成よりも実際の授業における利便が優先され，著者自身あるいはその直接の監督の下に使用されることを前提としたものが多い。

こうした種類の Textbook の中には，時代とともに版を改めて，長い生命を持ったものもあって，例えば，Pierce School で出版された Pierce Manual for the Typist は，1895年の初版以来，1900年，1908年，1914年，および1937年の4回にわたりその内容を増補改訂しているのである。

この時期までの Textbook のもうひとつの特性（あるいは欠点）は，Textbook の構成と教育期間との関係が不明確なことである。その課目・単元等に対する時間の配当をはじめ，一般の教科書としてはきわめて初歩的ないしは常識的なことがらに属する配慮に欠けていることが多い。これは単に，その「私家版」あるいは「授業資料」的な性格から来るものだけでなく，内容的にも厳密に云えば，教科書以前といったところがまだ少くないからなのである。

2. 3. 第3期（1901～1929）Programmed Textbook の発展

常識的な意味における Textbook の成立，すなわち自校における使用を前提として教材集的なものでなく，一般的に広く使用される教科書としての構成と内容を備えた Typewriting Textbook の出版は，1900年代に入ってからのことであった。

著者についても，従来の Vocational な Business College 関係者に代り，正規の大学において Business Education に携わる教授たちがあらわれるようになった。それはまた高校教育における科目として Typewriting が広く採り上げられるようになったからでもある。授業時間（あるいは回数）の配当も考慮されたが，この時期には最短50時間のものから最長 240 時間での授業を目標としたものまで，多くの種類があった。（授業時間数については，Typewriting の学校教育における普及にともない標準化の動きがあらわれて，1930年に定められた 150 時間とするものが多くなった。その後さらに変遷を経て，現在では1年用の 150 課目，2年課程用の 300 課目とするものが普通である。）

こうした学校教育用の，いわば狭義の教科書にとどまらず，自習者のための独習用教科書も，1900 年を境としてようやく出版されるようになったが，1916 年には最初の高等学校用の Textbook の出版を見ている。これは Gregg Publishing Company より刊行された SoRelle & Cutler の Rational Typewriting, 1916 Edition がそれであり，これを契機として高校を対象とした Typewriting Textbook は，その量，質ともに著しい発展を示した。

Textbook の構成は，2部あるいは3部から成ることが普通となり，Keyboard の Mastering, Speed Typewriting に加えて，Business Correspondence を中心とする Production Practice に関する訓練がその大半を示めるようになった。これは Typewriting 自身の，実社会における普及と拡大された用途とに対応したものであることはもちろんであるが，今日の Typewriting という学科は「現代国語表現法」および「文書実務」といった内容を兼ねるようになってきているのである。（我が国においては，さしあたり「英語文書実務」ということになろうが，外国語であるからには，なおのこと，Paragraphing, Punctnation, Capitalization, Expression of Numbers, etc. といったような「英語表現法」の実際的な指導を，限られた Typewriting の授業時数の中に織り込まねばならぬという問題が生じることになる。）

この章にいう第2期から第3期の半ばにかけて，Production Practice あるいは Typewriting

Application の強調課目が一時，法律文書の型式，いわゆる Legal Forms におかれていたことは上に述べた Typewriting の用途との関連を示してまことに興味深い。この傾向は1919年ごろから衰えて，Correspondence を中心に Tabulation Typewriting および Manuscript Typewriting が重点的に取り上げられるようになり，現在に及んでいる。

2. 4. 第4期（1930～　　）専門化と多様化の傾向

最初に大学用 Textbook が出版されたのは1930年に入ってからであり，South-Western Publishing Company より刊行，Lessenberry の 20th Century Typewriting, College Edition がそれである。それに続く代表的なものとしては1932年 Gregg Publishing Company から出版の SoRelle & Smith による Gregg Typing Techniques and Projects, College Course があった。

その後 Gregg（現在の Gregg Pubishing Division, McGraw-Hill Book Co., Inc.）および South-Western の両社を中心に，高校・大学用はもとより，多くの優れた Textbook が出版されているが，大学教育における Typewriting の内容には当然より高度のものが要求されたが，その方向のひとつは，例えば Executive のための Secretary としての必要知識と技術を養成するような Secretarial Practice 秘書実務の中心ないしは一環という色彩を持ち，他方は大学教育における各種の専門的分野に応じる Typewriting あるいは文書実務の進路をたどった。

かつて脚光を浴びた Legal Typewriting が法学関係として再登場するのはもちろん，例えば商学関係からは Accounting / Billing Typewriting, 医学関係には Medical Typewriting と云ったような，それぞれの専門知識に支えられた文書実務の研修を内容とする Textbook が書かれなくてはならなくなった。こうした College Typewriting における専門化のほかにも，使用者の対象と目的に応じた細分化も，近年における著しい特徴であろう。教育図書の出版事業においても，いわゆる Marketing Segmentation を目指す時期に入ったわけである。この範囲はまことに多種多様であり，例えば，高校教科書の Catholic School Edition から職業教育としての Typing for Air Force にまで及んでいる現状である。

特に1950年代以後の新しい傾向としては――Typewriting のみならず，あらゆる学科に対する Textbook についても同様のことであるが――Film, Tape を中心とする Audio-Visual Aids の充実が挙げられよう。Electoronics の技術は Color の Video Cassette を可能にした。こうした Hard な部門の飛躍的な発達に比べると，Soft の Programming の方はやや進歩の速度が劣っているようにも思われる。Computor の開発に象徴される高度情報化社会における Typewriting は，すくなくとも当分はその端末機器としての生命を維持しそうであるが，教育の面においてはどのような形を取るのか，簡単に予測はできかねるのである。

Audio-Visual はもとより，それを超えた各種の Teaching Machine は今後も陸続と登場することであろう。Textbook と併用することにより，いわゆる Programmed Study を可能とする Workbook, Working Paper といった Supplimentary Material も豊富に提供されている。こうした傾向は，全般的に見れば，必ずしも無条件に歓迎すべきものではあるまい。学科の性格によってはむしろ弊害の面が大きいことから，批判的な意見も少くないのである。しかしながら

Typewriting という科目は，こうした Programmed Training を有効に活用することが可能な体質を持っていると云えよう。

次に掲げたのは高度に System された現代の Typewriting Textbook Line の一例であるが，単一の出版社（Gregg Publishing Division / McGraw-Hill Book Co., Inc.）から刊行された50種にのぼる書目を見るとき，いわゆる専門化に加えて，課目数と対象さらには目的を限定しての多種多様な製作の行われているのには驚かざるを得ない。これは決して，過去にさかのぼり一定の期間中における同社の出版物を累積・集成したものでなく，現在発売中のもののみに限って List Up しているのである。そして，例えば South-Western Publishing Company のように，これに匹敵する Typewriting Textbook の系列を持つ教育図書出版社は，他にも少しとしない。

まず第一の種類は，Typewriting のために必要な Basic Language Technicalities の Polish Up を目的とするものであって，母国語に対しても，こうした Course が必要とされていることは，我々に取って，特に興味深いのである。

Language Technicalities for Typewriting

ENGLISH STYLES SKILLS BUILDERS: A Self-Improvement Kit for Transcribers and Typists

ENGLISH USAGE DRILLS AND EXERCISES, Programmed for the Typewriter

PUNCTUATION DRILLS AND EXERCISES, Programmed for the Typewriter

REFERENCE MANUAL FOR STENOGRAPHERS AND TYPISTS

SPELLING DRILLS AND EXERCISES, Programmed for the Typewriter

次は Complete Course の Textbook であり，学習の期間，程度，対象によって種類がある。Textbook に附属するものとして Working Paper, Learning Guide, Teacher's Edition, Teacher's Manual, Instructor's Handbook はもとより，Record, Tape Filmstrip, さらには Picture Poster, Wall Charts, Textbooklet 等がそれぞれの系列に応じて用意されているのであり，これは Complete Course 以外の Textbook ほとんどについても同様なのである。

Complete Typewriting Course

学習期間の長さに応じて	BASIC GREGG TYPING 1: Machine Control
	BASIC GREGG TYPING 2: Foundations of Production
	GREGG TYPING, Keyboard Course
	GREGG TYPING, 191 Series, Book 1. General Typing
	GREGG TYPING, 191 Series, Book 2. Vocational Office Typing
学校の種類により	GREGG JUNIOR HIGH TYPING
	GREGG JUNIOR HIGH TYPING: Catholic School Edition
	GREGG TYPEWRITING FOR COLLEGES

GREGG TYPING I: A Gregg Text-Kit in Continuing Education
GREGG TYPING II: A Gregg Text-Kit in Continuing Education
TYPING 75——Basic
成人教育用には　TYPING 75——Keyboard
TYPING 75——Advanced
TYPING 75——Expert
TYPING 75——Professional

家庭での自習用には　PERSONAL TYPING
PERSONAL TYPING IN 24 HOURS

Speed Typewriting 関係の Textbook および Material としては

Speed Typewriting

PROGRESSIVE TYPING SPEED PRACTICE
TYPEWRITING DRILLS FOR SPEED AND ACCURACY
TYPEWRITING SPEED STUDIES
TYPING IMPROVEMENT PRACTICE, Manual Edition
TYPING IMPROVEMENT PRACTICE, Electric Edition
TYPING POWER DRILLS
TYPING SKILL DRIVES

Production Typewriting 一般および専門化に応じての職業教育用には

Production Typewriting (Vocational and Specialized)

APPLIED OFFICE TYPING: A Practice Set in Clerical Typing
GREGG TYPING 3: Addressing and Billing
GREGG TYPING 4: Personnel Papers and Forms
TYPING MAILABLE LETTERS
TABULATION TYPING
QUICK SURVEY COURSE IN FORMS TYPING
TYPING MEDICAL FORMS
MEDICAL TYPING PRACTICE
THE MEDICAL SECRETARY
LEGAL TYPEWRITING
HANDBOOK FOR THE LEGAL SECRETARY
TYPING PRACTICE FOR THE TECHNICAL SECRETARY
THE TECHNICAL SECRETARY
PRACTICE FOR PROFESSIONAL TYPING

EXECUTIVE TYPEWRITING
CIVIL SERVICE TESTS FOR TYPISTS
TYPING FOR THE AIR FORCE

3. あ と が き

本稿は東京立正女子短期大学論叢第二号に発表した「Typewriting 教育法の研究 その 1—Typewriter の開発と Universal Keyboard の問題」を承けるものである。従って本稿の主題である“Typewriting 教育法”の問題に関する研究対象の領域と研究目的の設定については前稿を参照されたい。

本稿においては，主とし与えられた紙数の関係から，もっぱらアメリカ合衆国における Typewriting 教育の展開に終始することとなった。イギリスをはじめとする他の英語国における考察はもとより，Typewriting が我が国の英語教育の中に 何時，如何にして 取り入れられたかという問題をはじめ，続稿に持ち越すところが多い。ご諒承を願う次第である。

BIBLIOGRAPHY

Baty, Wayne Murlin, *Business Communication & Typewriting.* Belmont, California: Wadsworth Publishing Company, Inc., 1962.

Blackstone, E. G. & Smith, Sofrona L., *Improvement of Instruction in Typewriting, Second Edition.* Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1960.

Bliven, Bruce, Jr., *The wonderful Writing Machine.* Machine. New York: Random House, 1954.

CIem, Jane E., *Technia,ues of Teaching Typewriting, Second Edition.* New York: Gregg Publishing Division, McGraw-Hill Book Company, Inc., 1955.

DeHames, Drothey Jean, “Speed and Accuracy Standards for First-Year Typewriting,” *National Business Education Quarterly* (Fall, 1957).

Kamnetz, Harvey, “The Relative Importance of Emphasis on Sreed and Accuracy in Beginning Typewriting,” *National Business Education Quarterly* (Fall, 1956).

Lamb, Marion M., *Your Eirst Year of Teaching Typewriting, Second Edition.* Cincinnati, Ohio: South-Western Publishing Company, 1959.

Lloyd, Alan C., “Typewriting Futures—What Will Typing Instructions Be Like by the Turn of the Century?” *Business Education World,* Vol. 48, No. 6 (February, 1968) and Vol. 48, No. 8 (April, 1968).

Milham, George E., “What Good Is Research in Typewriting?” *Business Education World,* Vol. 48, No. 1 (September, 1967).

Pepe, Philip S., *Personal in 24 Hours, Third Edition.* New York: Gregg Publishing Division, McGraw-Hill Book Company, Inc., 1960.

Rainey, Bill G., “Variations in Collegiate Typewriting Courses, *Business Education World,*Vol. 47 No. 5 (January, 1967)

Russin, Allien R. & Wanous, S. J., *Philosophy and Psychology of Teaching Typewriting.* Cincinnati, Ohio: South-Western Pnblishing Company, 1960.

Business and Economics Textbooks and Supplies for Business Schools and and Colleges, May, 1972. South-Western Publishing Company.

Gregg Division 1971 Catalog. Gregg Publishing Division, McGraw-Hill Book Compay, Inc.

教育の経済理論に関する一考察

鍾　　清漢

一　はじめに

教育と経済のかかわりあいについては，すでに多くの人がいろいろの角度から論議し，また評価をしてきた。教育が人間の労働能力を向上させ，経済生産に寄与するという認識は，アダム・スミスの指摘以来，既に久しい。その後，A・マーシャルが「国家投資としての教育」の概念を明確に打ち出し，経済繁栄の基本的原因として「蓄積された知識」の重要性を認め，教育訓練を通して人間に対する投資は，「あらゆる資本の中で最も価値ある」ものであるとしてから，いろいろの説が唱えられてきた。だが，本格的にこの問題が，欧米諸国で高い関心をもたれるに至ったのは，なんといっても1956年ソヴィエトが打ち上げに成功したスプートニクの衝撃によることは，よく知られるところである。しかるに，それが今日の教育投資論にまで発展したのは，労働力不足に伴う成長率の足踏みの傾向，科学技術者を始めとする人材養成計画の低迷，開発途上国に対処する問題からであるといわれている。

ところで，本文は今日における主なる教育投資論を考察し，マンパワー問題に踏み込んだ検討を進めるとして，その前に教育投資効果に関して，それがどれだけの有用性をもちうるのかという点について，大ざっぱに吟味をしておきたい。

二　経済学説にみる教育と人的能力

周知の如く，一国の経済発展を図るには，密接に関連しあういろいろの要因をとらえてこそ可能である。例えば，天然資源，マンパワー資源，資本，それに安定した政治環境などを挙げることができる。しかしそのうちでも最も重要なのはなんといってもマンパワーである。たとえ，天然資源に恵まれても，それを開発するのはやはり人間であるし，機械設備はマンパワーによって創作され，発明され，操作される。今日最も機能的とされている科学的管理にしても，高度の知能が必要とされる。また，人間の能力の開発が，社会のすべての人の知識と熟練度，能力を増進させるのである。経済学の言葉を借りれば，人的資本を蓄積し，これを経済開発のために効果的に投資することである。マンパワーが経済発展を押し進める原動力であることはすでに古くから経済学者によって指摘されている。例えば，アダム・スミス，マーシャル・マルクス，シュンペーター等が挙げられる。彼等のそれぞれ独自の見解が，今日のマンパワー理論といかなる接点があるか，以下これについて考察してみたい。

1.　アダム・スミス（Adam Smith）

スミスはその名著『国富論』で，教育の重要性について，随所に述べているが，その第二冊の

第一章「資財の分類について」の中「固定資本」の一節で，社会におけるすべての住民や成員が取得している必要で有用な能力がある ことに言及している。「社会の全住民または全員の習得せる有用なる才能，かくの如き才能の習得には，その教育，研究または年期奉公の期間中に亘って，習得者の生活を維持するために，常に実質的経費がかかるのであって，それは，いわば彼の身に固定され実現されている一種の資本である。これらの才能は，彼等にとって彼の資産であると同時に，社会にとっては彼が属する社会の一種の資産である。職工の改良された技工は，労働を容易にし，且つ省略する事業上の機械または器具として差支がない。もとより何程かの経費はかかるけれども，この経費は利潤を伴って償還されるのである。」[1] スミスによれば，人間はそれらの必要で有用な能力（熟練技能）を修得するために，教育と学習の過程において消耗は常につきものであるが，しかし，これらはその個人に対する密着した最も確実な投資と見てよい，学習し得たそれら耐久的なものは，その個人自身に密着した資本であるだけではなく，その資本は社会の財産でもあるという。アダム・スミスのこのような理論が現代の教育投資論にどの程度影響を受けているか学説史的な論証は困難であるが，シュルツはスミスを，人間を資本とみなす数少ない哲学者であり，経済学者であると評価した。[2] その着眼には，明らかに今日のミクロサイドからみた現代教育投資論との共通性がある。やはり，スミスをその先駆的理論とすなして差しつかえない。

2. アルフレッド・マーシャル（Alfred • Marshall）

スミスのこうした問題意識をその伝統の中で再生したのは，アルフレッド・マーシャルであった。彼はその主著「経済学原理」(Principles of Economics) の中で，序論，基本概念の定義欲望とその満足，生産要素，需要，供給，価値の一般関係，国民所得の分配といっ構成でその理論を展開している。[3] 彼の「経済学原理」の中で特に人的投資の理論として取りあげられるのは，生産要素の考察である。彼は生産要素としての土地，労働，資本の三要素の他に「産業組織」，「人々の健康の強さ」と「産業訓練の問題」を大きく問題として考察しているというところが，人的能力要因への接近といえよう。つまり，人間の肉体的，精神的，道徳的な健康とその強さが依存する条件こそが産業能率（＝生産性 productivity）の基礎であるといった発想法である。この発想法自体すでに人的能力要因の重要性を問題としてとらえている。ところで，こうした問題意識の提起が，今日のいくつかの人的投資論に影響を与えている。そこでその主要なる論点を次に要約しておこう。

(1) 人間の一般的能力は幼い子供時代の生長段階における環境によるといわれ，一般的な学校教育に依存する。

(2) 専門教育の目標は第一には目と手の一般的器用さを身につけさせること，第二には特定の職業にぜひとも必要なものだけでなく，工芸的な熟練と知識と調査方法を習得させること。

(3) 徒弟制度ではもはや多種多様な近代的大産業に必要とされるすべての青年に一切を学ばせることが不可能になってきたこと。

(4) 社会大衆が一般に利用できる多くの機会を与えることは単なる公共資金，または民間資金を教育に費すことで，多数の人の潜在能力を発掘する糸口をつかむだろうということ。

このように，マーシャルも教育の重要性については，文明国のもつ教育への意欲をとらえ，その経済的な局面への貢献を評価している。康代光も マーシャルにふれて，「教育は即ち国の投資で

ある。……人間に費した教育上の投資は最も有効な投資である。」[4] という主張を評価している。

この投資はまた「政治的には民主主義政治への市民の参加であり，社会的には伝統的な因習の束縛をたちきって国民の自由にして満足な生活を保障することである。つまり，人間能力の開発は，経済の成長発展と社会の近代化を推進するのと解されてきている°」[5] と理解されていることがいえよう。いうまでもなく，人的能力の開発の方法は一様ではない。まず第一に，正規な教育制度にみられる各水準の学校教育，第二にさまざまな種類や内容をもつ企業内における教育訓練や各種団体会員の能力開発，第三に，個人による自己開発，第4に医療制度や公衆衛生制度が人的能力を身心両面から開発するために役立っている。[6]

3. シュンペーター（J. A. Schumpeter）

シュンペーターにおける人的投資論は，それを生産要素としての労働としてとらえている。彼は指導労働(directed labor)と服従労働(directing labr)を区別したのは一見きわめて本質的である。それには主として次の二つの特徴からである。まず生産の体制においてより高い地位を占める指導という要因は，指導労働を他の労働から区別するものとなる，といったのがその第一の特徴である。そして第二の特徴は指導労働は，それ自体何らかの創造的なものを持っているという点である。つまり，自ら自分を樹立し，また特殊の機能を果たすものであるといっている。[7]これについて井上毅は，「ここには明らかに，労働すなわち生産における人的要因の創造的機能の側面が適確にとらえられている。そして単純な労働とちがって自ら目標を持って創造的活動（イノベーション）の推進者となる人的要因を考えているのである。」と，そしてさらにいずれにしろ生産におけるイノベーションファクターの担い手という主体としての指導的労働あるいは企業者職能の考え方は，今日の人間投資理論あるいはマンパワー論義の本流的な思想と共通の問題提起の仕方である。」[8] と述べているが，確かにシュンペーターのこの理論は，第三の生産要素を考える現代的な取り組み方として，はっきりいって，これが後の人間能力開発の発想にかなりの影響を与えているとみていいだろう。

ところで，スミス，マーシャル，そしてシュンペーターのように，人的資源が経済成長にとってきわめて大きな関連があるということについてのこのような経済学の伝統であったにもかかわらず，その後の経済学者はむしろ軽視してきた。それというのは，人的資源は有形資本のように計量し易いものでない事と，一定の規準がなく，投資額と収益額に対する計量が難しいという理由によるのかもしれない。しかしながら1957年前後，こうした教育投資の問題に関心をもつような経済学者が多く輩出した。その背景にはいろいろあるが，その中，特にスプートニクのショックが先ず取り上げられよう。これより新しい人的投資論が多数輩出した。その代表者といえば，誰もがシュルツをあげることができよう。

4. セオドー・シュルツ（Thedore W. Schultz）

シュルツ教授が1960年に全米経済協会での講演で次のように述べたことは特に多くの人の関心を呼んだ。シュルツは,「人間に投資するなどということは考えてみるだけでも不愉快だと思う人達がいる。奴隷時代は別であるが，人間を資本財とみることは，今の私達の価値観や信条とは相反するものである。」と，一応こうした考え方への反発をひきあいにしながらも，さらに彼は『……労働という人間の働きがなんら知識も技能も必要としない能力，または労働者はすべて均一な能

力をもっという素朴な認識に基づくのは，古代でさえ間違っているし，今の時分においてはなおさら間違っている。われわれは個人ひとりひとりの能力を経済要素の量的指標の１つとみるべきではないことは，機械の運転具合をもって判定できないのとまったく同じことである。といった人的投資論を展開した。」[9] こうした人間能力の経済における重要性を重視して教育投資を経済の分析に使った研究がシュルツの他に，クズネッツ，クリステンゼン，テンヘルゲン等が経済学の側面からのアプローチとして労働者所得の顕著の増加に早くから目を向けた。それというのは，「従事者１人当り所得の低い産業から高い産業への移動」といった理由によるものであるという。

5. クズネッツ (Siman Kuznets)

クズネッツによると，この労働力の産業間移動が従事者一人当り所得の全増加の約40％の理由をなすものであったというが，シュルツは，『これらの所得増加，労働供給の調整に不断に生じる遅れによる準地代であろうか。否，前述したような人的投資の収益だとする方が，はるかに理論に合っているのではなかろうか。」[10] と指摘し，さらに前述のクズネッツによると，従事者１人当り所得の全増加のうち60％は「説明不能」とされたわけである。この部分もまた，たなぼた式でもないし，労働の準地代でもない。前述したごとく，それらもまた，主として技能などの諸能力に対する投資の収益であろう。今日では職業訓練，学校教育は，重要な要因となってきている。[11] さらにクズネッツは，「……これら（教育，研究，保健及び娯楽面における費用）はさまざまな複雑な生産系統の効能を改善することによって経済成長を促進している。」[12] とこのように人間能力を高く評価したいわゆる「教育投資」の研究が，先駆的な理論の展開を踏まえて近年ますます盛んになってきている。そして，この問題を理論的に取り扱う姿勢にもいろいろアプローチの方法と理論化のさまざまな段階が存在する。こうした「数多いそれらの着眼を詳しく検討してみると，それぞれ独創的な発想形式をとっていて，今後の理論展開に示唆するところが大きいと考えるが，その着眼を中核に一つの理論体系を完成したとみられるものはほとんどない。」[13] とし，先に触れてきたように新たな観点から「資本」という言葉を考え直し，物的資本に対して人的資本という概念を認めるとすると，生産要素の人的要因についても投資という視点が成り立つはずである。こうした「人的投資理論」の主なものにH・ライベンシュタインの物質的な富と人間が身につけた生産能力の総計を「一般的資本」とよぶ理論，[14] J・ベイジーの教育学および経済学の分野における比較学的論証が特にすぐれている教育経済学[15] と，E・ギンズバーグの人的資源論[16] と，シュルツの前述の人的投資論がある。ギンズバーグは現実的政策論の立場から人的能力向上，あるいは教育の重要性を強調する。一方シュルツは体系的にかなりまとまった人的投資論を展開している。彼は「資本，所得比率の上昇」，「資源（土地，労働，資本）の生産性の上昇」，「労働者の実質所得の上昇」などといった動態的な経済の動きの中にこうした三つの問題を提起する。そして，それを説得できるものは，実は人的資本にほかならないというのである。ところでマンパワーの有効なる活用が経済成長を促進するというこのような抽象的概念に対して，具体的統計数字をもとにマンパワーが経済成長に寄与できることを説明しようとする試みがなされた。これは人的資本の内容をつかむために行う教育投資の計測方法，とくに教育コストの中に「就学時間に得べかりし所得」を加えるなどは，いろいろの理論の中でも独創的であるといえよう。シュルツは「アメリカ合衆国生産力の増長は僅かその1/5が工場設備の改善によるものであ

るとし，その他の4/5は生産方法，管理と労働者素質の改善である。」と，さらに「マンパワー素質の改善は，成人教育（Adult Education），雇用しているマンパワーの在職訓練，健康および栄養の増進などが，経済成長を促進する主なるファクターである。」といっている。幅広いシュルツの理論展開の全貌を説明することは，本文の主なる趣旨ではないが，しかし，人的資本による経済成長，人的資本の内容と政策，などからみて，彼の人的投資論は投入サイドの接近であって，産出サイドの分析についてはなされていないといえる。なおシュルツの外にも，この種の研究については，デニスンのものが挙げられる。

6. デニスン（Edward F. Denison）

デニスンは，経済成長の源泉についてもっと詳細な研究を行なった。彼は労働者や資本の増加に帰属させることのできない残余を，多くの部分に分け，そのうちに知識の進歩と規模の経済性が最も大きいとみた。彼は教育の経済的効果に関して次のような結論を出している。1929年から，1957年までに，アメリカの普通の労働者は，毎年約2%の教育費を増し，これに対応して労働の量を毎年0.97%改善し，実質国民所得成長率を約0.67%高めた。これは実質国民所得の成長率の23%に当り，労働者1人当りの実質国民所得の伸びの42%になる。また経済成長への教育投資効果は，1909年～1929年間に較べて1929年～1957年間において約倍増した。[17] デニスンは，経済成長の源泉をさぐる1つの接近方法を発展させたといえよう。彼は労働の寄与部分を労働の質の向上によって修正するという手段をとっているが，質的要素がもたらした国民生産の増加分を推定するに当っては，学校教育，職業教育の投資額を確認し，ついで，その収益を測定するという方法をとらない。直接質的要素を想定し，それを所得の，増加と関連づけている。つまり学校教育のみの資料が用いられただけで，企業内訓練やその他多岐多面にわたる効果，労働の順応性，応用技術の進歩等が除外されているために，効果は過少に評価された傾向がないともいえない。しかしながら，その後デニスンの計算では，アメリカにおける経済成長に対する教育の効果として，1909年～1929年間に29%，1929年～1956年間に42%とし，さらに予測として1960年～1980年間に40%と挙げていることは注目に値えしよう。[18]

三　教育学説における経済的要因

以上，とりあげた理論はほとんどが経済学からのアプローチである。教育学ないし哲学の側面から教育と経済が密接なる関係を待っていることを認識し，これについて論じているものにバードランド・ラッセル，T・A・ラワリーズ等がある。ラッセルは「教育と社会体制」[19] の第14章で「教育上の欠陥というものはどんなものだろうと，悪い経済体制のせいであるといった信念を持つ人たちがある。わたくし自身は，これを信じない」といった論議から教育の問題を何もかも経済体制に結びつけるというようなことではないという。教育と経済は必ずしも常に表面上つながりがないようにみえても，その関係は非常に深いといっている。そして「教育の機能に関する世間一般の見解を完全に変えてしまうほどの，種々の事件が起った」とし，[20] そのうち最も重要なものは，普通義務教育制度の確立である。少年少女たちは，読み書きを知っている方が知らない場合よりもはるかによき市民となり，より有能な労働者になり得ることが発見された」と論じている。[21] さらに教育の実際的効用という考え方に向わせたもう1つの要因は科学と産業との成

長で家をあった。技術過程は今日，科学的知識を要求しているし，新しい発明は富をふやし，国強大ならしめる源泉なのである。

しかし教育が効用性を重視する考え方に支配されてしまえばどうなるかといえば，ラッセルは，「科学と産業上の技術の地位は，現状よりもはるかに大きなものになるであろうし，文学的な教養の地位ははるかに小さなものとなろう。現在は完全にそうなっていなくても，次第にそうなりつつあるし，また比較的近い将来に完全にそうなってしまうであろう[22]」という将来への大勢の見通しは警句ともとらえる言葉としてわれわれも容易に理解できよう。

こうした前提に立ってラッセルは，教育におよぼす経済的要因の影響は，次の5つの主題のもとに考察しうるという。[23]

第1は，国家の経済的条件に応じ，教育に費される経費はまちまちであるが，西欧諸国がもし産業革命によって国力を増さなかったら全面的な義務教育は不可能であったろう。西欧の標準を採用する以前に，中国に存在したほど，学問に対する尊敬を示した国はなかったと言ってよい。しかしそうした中国（筆者注，革命以前の中国）さえも，総人口の5% 以上のものに読み書きを教えるほど裕福ではなかった。1780年のイギリス，いや1830年代のイギリスにおいてさえ，すべての国民を学校に入学させるだけの十分な税金を課することは困難であったと指摘している。

第2は教育の目的の1つは，総生産を高めることにある。恐らく普通教育を最初に始めたひとびとの心に秘められた原則的な動機はそれであったろう。また疑いもなく健全な動機でもあった。読み書きのできるひとびとはできないひとより能率的である。そして生産を最大限に高めようとする動機は，技術教育や科学的な教授や研究を促進させることに，直接に作用するのである。つまり科学的知識の有用性が認識されたら，科学のもたらす恩恵がますます増大することが期待でき，中等教育のカリキュラムのなかにも，さらに多くの科学教科の時間が与えられることが期待できるであろうと。

第3に，分配の機構は，われわれがこれまで考えていたよりもはるかに，深刻な影響を教育に与えている。分配の機構が社会を諸階級に分割しているのであり，階級のあるところはどこでも異なる階級はそれぞれに異なった種類の教育を受けるにちがいない。共産主義社会といえども，権力の座はあり得ようし，その仕事が異常に快適な地位もありうるであろう。このような地位を占める人たちは，ある意味で権力の少ない不愉快な仕事を伴う地位を占める人たちよりも高い階級を構成することもあろう。そこに自から教育的競争がおこるが，しかし教育における競争は，単にかれら自身のためではなく，彼らの子どもたちのためにも，すべての人々が経済的平等を得て経済的安定を得たときに現在の状態よりはるかに害毒を少なくするであろうという。

第4は寄附金である。寄附金は他の方法によっては不可能なほど教育の宗教的な面をより保守的ならしめる力を持っているといい，その理由はアメリカにおいては寄附行為は大体比較的新しいことであるが，それでさえ寄附は保守的でしかもたいてい教養のない巨大な大財閥の意思にもとづくものである。だからそれらは，教育の進歩的な運動を阻止するのに相当注目すべき役割を果たすことになる。

第5は伝統ということである。ラッセルは特に過去において作用したが，現在は作用していない経済的要因より生ずる伝統というものを考える。たとえば性道徳（産児制限に反対する道徳な

ど）がそれである。それゆえに教育は，社会自身ができ得るかぎり速かに新しい要求に適応しようとすることを阻止する結果になりやすいというようにとらえている。

以上の５つの主題からラッセルは，このような経済と教育の関係の吟味において，第２の主題のように教育の目的としての総生産の拡大をとり上げ，一方で知識それ自体が目的であるような教育を否定しているところは，これまで考察してきた経済学の側からの人的能力への問題提起に見合った動きであろうと思われる。

ところでラッセルと同じく教育学の立ち場でも，こと経済と教育の問題に関しては，もっと積極的・現実論的に経済と教育の問題をとり上げたのはＴ・Ａ・ラワリーズ等である。[24] ラワリーズ等は技術の変革，あるいは，産業の進化と教育の相関についてかなり突込んだ考察をしている。とくに，職人の技術的改良は初等教育の普及であり，それが経済革命をもたらすものであるとし，『一方社会的には教育政策が現在の社会事情に関連して働く人たちの選択をし，人的資源を割り当てるものになっていることが大切である。一国の経済発展の将来を慎重に考慮し，人的資源をよくしらべ，その上でこれを賢明に配分することは，教育政策にたずさわる人の責任である。』という着想は，上述の経済学の側からする人的資源論と気脈を通じた考え方といえるであろう。[25]

四　人的能力開発の指標

これまで生産に役立つ労働は肉体労働だけだという思想，それと「レジャーのための教育」という時代の教育を批判し，そうした教育制策からの解放から生産と福祉をを増大したかということをドラッカは問題にしている。[26] これは，教育が進んだ形の投資であり，教育を受けた人たちは「社会の資源」といったもので，つまり，社会ないし個人が教育によって何を得るかということについてのことである。

こうした着眼からハービソンはマイヤーズといくつかの共同研究をなしているが，そのなかでも開発途上国のために比較可能な総合指標をつくりだしている。[27] 従来の研究は，人的能力開発に関する１国，あるいは１地域数ヵ国の量的分析に限定されているのがほとんどといってよい。この点に関してハービソン・マイヤーズの総合指標は，限定を含むとしても，すぐれたものといえよう。

ハービソンたちは，１国の人的資本量と特定期間の人間資本形式を重要な指標としている。こうした関連で測定可能な次のような事項に注目した。

(a)　先ずは，教育修了のレベルとして，初等教育・中等教育・高等教育を区別している。中等・高等教育は高水準人間能力と関連し，そのなかでも科学・技術履修者の比率は，とくに重要である。

(b)　第２に，高水準職業人の数と全人口，労働力との関係である。その中には，科学者，技術者・経営者・教師・医師・科学技術の技能者・行政司法官吏・看護婦・熟練労働者の職長等が含まれる。

ところで，人的資本の蓄積率を示す指標として最も望ましいのは，高水準職業についている人数の純増加であると考えられる。また正規教育の修了者数の純増も有用であるが，データの入手難からそこで利用可能な指標として次のように分けている。

(1) 人口1万人当り科学者・技術者数

(2) 人口1万人当り医師と歯科医数

(3) 人口1万人当り初等・中等学校教師数

(4) 学齢児童総数のうち初等学校就学者数の比率

(5) 初；中学校の総合の修正就学者数

(6) 中学就学者の同年齢の青少年総数と進学者数の比率

(7) 同一年齢グループ中の高等教育就学者

以上について，国際比較の観点からみて，いろいろと利用上の不便がある。その一例をあげると，たとえば，高水準人間能力として戦略的に重要とみられる科学者・技術者の統計は，先進国をも含めて3分の1の程度しか利用することができない。また，国によって概念の規定が統一されていないので，量の把握だけではなく，質の困難がある。

いずれにせよ，世界の多くの国の経済開発をめぐる人間能力の問題を実証的に調査研究して，経済発展と人間能力の開発との相関度合をさぐるという試みは高く評価できよう。とくに，その相関値に基づく4つの発展段階パターンを設定し，さらに，その基礎の上に開発途上国の経済開発達成の手段としての教育投資の政策立案の指針を設定しようとする試みは，この研究の特色といえよう。ハービソンたちのこの研究からわれわれは，人間能力開発の課題は，正規の教育制度の検討が迫られていることが先ず痛感するであろう。また経済開発のために人間能力が重視され，それは学校教育の領域だけではなく，産業界企業内および職場の教育訓練の検討が必要べからざるものであることが痛感されよう。

五　国家教育投資のモデルと人的資本の創造

近代国家の建設にとって経済および国民の開発と人間活動は重要である。前述のこの問題に対するいくつの研究を基礎的概念として，貧困，病弱，無知，停滞の国々にとって，次に考察するハンナの研究はとくに緊急なる課題であるだろう。

マンパワーの開発に関連して，教育投資を最初に国家教育投資のモデルに図式化したのは，ハンナ（Prof. Paul R. Hannai StandfordU. “Conventional and Unconventional Education in newly Developed Countries” 1962）である。

ハンナは「国家教育投資人的資本創造のモデル」を求めて，教育投資の利益に転移する過程を明らかにするために次の4つの図式をもって説明を加えている[28]

つまり，投入—育成—産出（A Model of National Investment in Education—The Input—Through Out put spiral）といった循環過程に注意すべきであるという。

図1で示されているのは，まったくの非数式のモデルであり，「投入」，すなわち教育でいうカリキュラムである。カリキュラムの投入は，国家の収益として「産出」する。太い矢印は右下方を指して「育成」（カリキュラム・教授学習の過程と被教育者）と注釈しているが，「育成」とは，過程の「ルート」と被教育者を含むものである。ここで投入したものが，矢印に示されているように，国家収益となっている。この産出した国家利益が再び「投入」に影響するという循環過程を説明している。

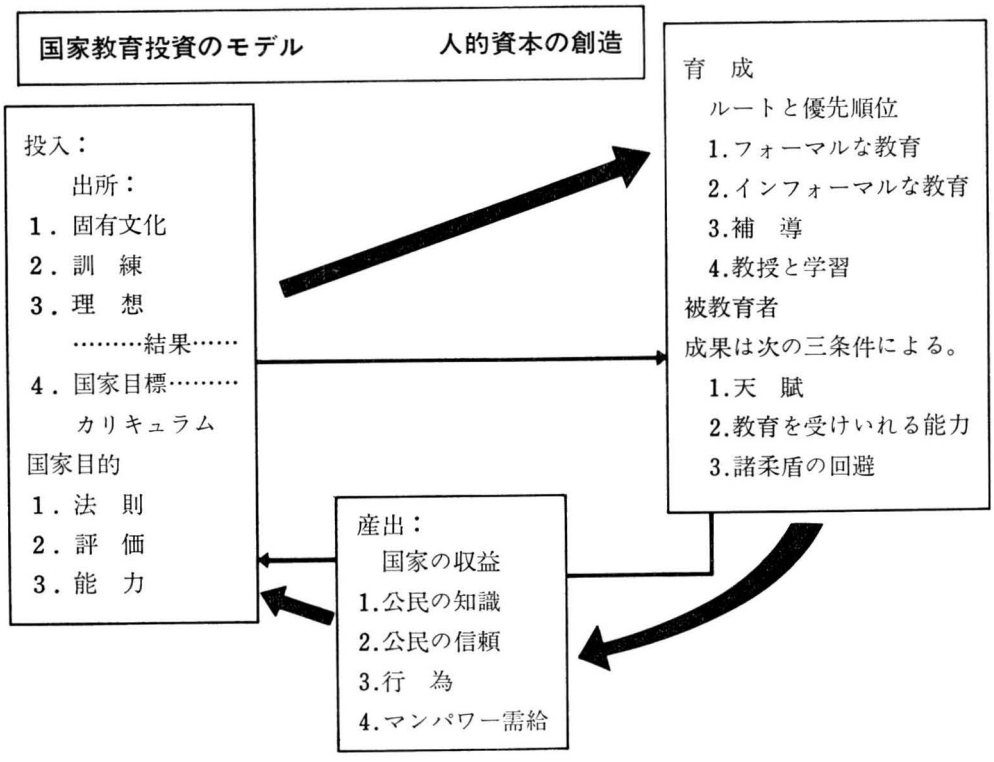

国家教育投資のモデル
人的資本の創造
投入：
出所：
1．固有文化
2．訓　練
3．理　想
……結果……
4．国家目標……
カリキュラム
国家目的
1．法　則
2．評　価
3．能　力
育　成
ルートと優先順位
1.フォーマルな教育
2.インフォーマルな教育
3.補　導
4.教授と学習
被教育者
成果は次の三条件による。
1.天　賦
2.教育を受けいれる能力
3.諸矛盾の回避
産出：
国家の収益
1.公民の知識
2.公民の信頼
3.行　為
4.マンパワー需給

図 1

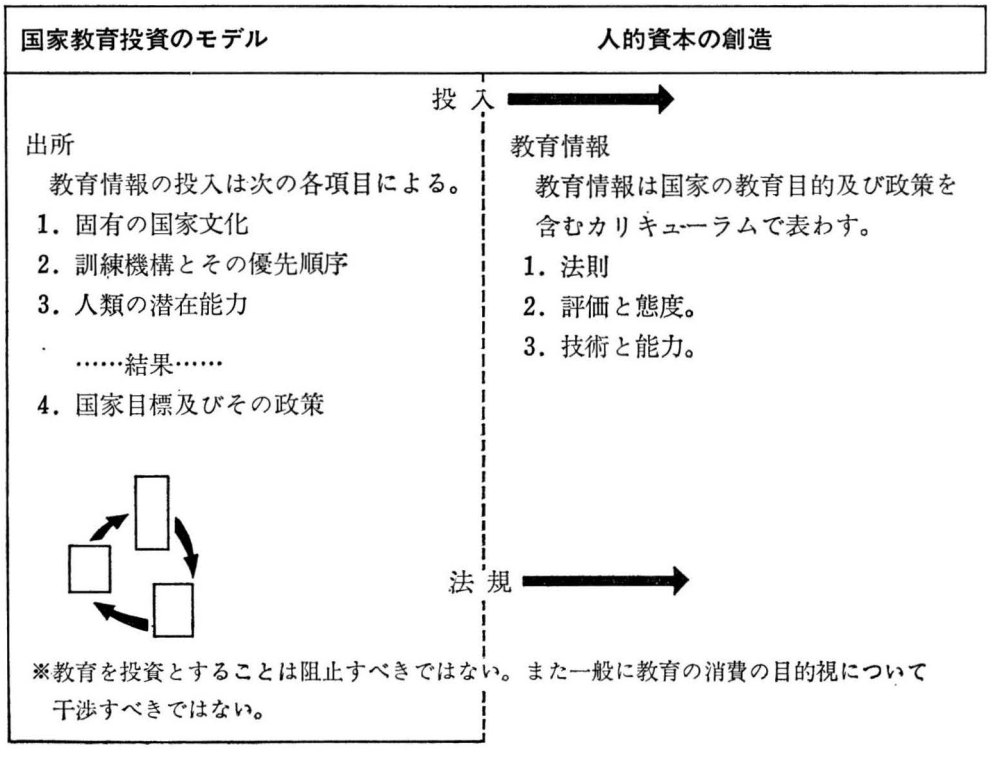

国家教育投資のモデル
人的資本の創造
投 入
出所
教育情報の投入は次の各項目による。
1．固有の国家文化
2．訓練機構とその優先順序
3．人類の潜在能力
……結果……
4．国家目標及びその政策
教育情報
教育情報は国家の教育目的及び政策を含むカリキュラムで表わす。
1．法則
2．評価と態度。
3．技術と能力。
法 規
※教育を投資とすることは阻止すべきではない。また一般に教育の消費の目的視について干渉すべきではない。

図 2

国家教育投資のモデル※　　**人的資本の創造**

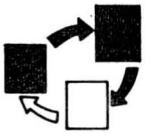
育成 ⟶

ルート（順序）
教育情報(課程)はプロセスを経て
次の諸機構に到達する…

1. フォーマルの教育機構
2. インフォーマルの教育機構
3. 補導及び対談
4. 教授と学習のプロセスはアドバイス及び自主性を含む。

被教育者
育成の成果は次の諸事項にかかわる。

1. 天賦才能、文化資本及び個人の機能能力
2. 個人、団体、国家の受容能力
3. ロス、重複、諸矛盾の回避



暗号 ⟶

※教育を投資とすることは阻止すべきでないし、また一般に教育の消費の目的視について干渉すべきではない。

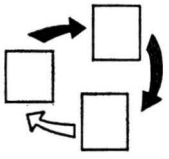
図 3

国家教育投資のモデル　　**人的資本の創造**

産出 ⟶

国家収益…
教育投資の結果、国家は次のいくつの収益を獲得する。

1. 公民の国家の目的に対す理解の達成
2. 公民に国家の目的に対する信頼の達成。
3. 個人及び団体の行動が自主的に国家目的及び政策との合致。
4. 国家に必要とする優秀なリーダー及び技術工への対応と供給。



※教育を投資とすることは阻止すべきではない。また一般に教育の消費の目的視について干渉すべきではない。

図 4

図2については，教育を投資とみることは決して教育を消費と見るという古来の観点を除外するものではないといっている。すなわち，1人ひとりの人間が如何なる教育が必要であれば，教育マーケットではそれなりの教育を与えるべきであるとし，消費者は，その技能と知識を増長するためには総合的需要として教育体系の投入（カリキュラム）を決定するという。国家の目標および政策は出所で示されている3つのカリキュラムによって打ち出される。

次に育成ルート（優先順序）および被教育者については図3で表わしているとおりである。ここで示されているカリキュラムの伝達は，フォーマルとインフォーマルの教育機構を通じて次のような順序を踏まえている。つまり，(1)補導や対談の方式によって青少年が自らの興味と潜在的能力によって就職を決定することで国の発展の目的に合致する。(2)「教えること」と「学ぶこと」はともに，改善を前提に試行することが望ましいと。

最後に，産出，すなわち，投入と育成の結果を表わす図4は教育投資の効果は，マンパワーを発展させることによって図の中にあげている4つのこうした螺旋形のダイナミックスなサイクルを完成している。図式はたしかに開発途上国にとって体系的にまとめられたものであるといえる。しかし，人間性を無視した面も同時に指摘しなければならない。

ともあれ，人的資源の開発が教育によって可能であり，それが経済発展につながることはいうまでもない。またこれによって，経済の領域から，政治社会諸制度の創造，教育施設の充実を可能にする。また「経済の離陸」に必要とされるマンパワー，および各種リーダーや先行人材のエリートの養成などは開発途上国にとってもっとも緊急なる課題である。このモデル図式はこうした経済の要素にかかわる政治社会制度の創造と開発を求めることで開発途上国にとっては参考になれよう。ただ，教育がこれにより経済に従属することによって，人間性を無視する恐れがあることはすでに述べたとおりである。

六　教育投資の効果

1.　教育の生産性をどのように測定するか，

これまで教育投資について代表的な学説を中心に論じてきたが，こと教育投資の収益に関してはその推計の作業がそれに比しておろそかにされてきた。その原因は算定方式の困難[29]と，教育体系範囲の広いこと，それに教育発展を絶対値として必要と考えるといった理由によるものであろう，ところが，ここ半世紀において経済先進国の成長率が急速に高まった理由は，資本，労力および原料の投入だけではないことがいわれてきた。[30]つまり，経済成長を構成する重要なる部分として，技術進歩および人的資源が有効に利用されることによって生ずる教育投資の成功をみとめるようになってきたのである。ユネスコ社会科学局分析部長のH・Mフィリップは教育の経済成長に果たした役割を過去の歴史にさかのぼって示した非常に面白い深い研究として数人の名をあげ，まずソロー（Robert M. Solow）は，経済成長10%は人口成長と天然資源によって説明できるが，残りの90%は，技術進歩の残余要素（Residualfactor）すなわち，資本と労力以外の因素であると推計している。マッセル（Dr. Mussel）もまたアメリカの製造業に対して類似した推計をしたところ同様な結論を出している。ヨーロッパにおいても，オークルスト(O. Au Krust)が1900年から1955年間におけるノルウエーのGNPを計算した結果もまた同様の結論がみられた。

イギリスにおいては，レッドウエイ（Roddaway）とスミス（Smith）による研究，1948年～1954年の6年間にイギリス製造工業にみられる資本と労働力の「投入」は，1人当りの「産出」量の4分の1にすぎないことを示した。この方法は国民経済計算の手法に基づいており，統計はコブ・タグラス生産函数の理論的な枠内で使用されている。これは実際の生産函数ではなく，また収益の測定にあたっては資本の平均生産性よりも限界生産性を用いるべきであるとの批判がある。この批判は，教育の役割の重要性に向けられたものではなく，用いられた測定方法に向けられたものである。また，それぞれの経済分野において生産要素を実際に配分する場合の基本的な考え方に向けられているのである。[31]

2. 残余要素と生産関係

残余要素計算法は「労力」と「資本」の増加による経済成長を推計するが，実用においての困難は，残余要素は経済成長の段階の違いに従って変化する。発展途上国の残余要素はわりに度合が小さいが，統計資料の備わった開発先進国ではわりに高い。それは資料が先進国にのみ適用可能というのがその主な原因である。

ところで，シュルツはいくつかの開発途上国の農業生産を比較して次のような統計数字を出した。[32] すなわち，米国において1910年から1913年および1945年から1949年の間に増加した生産量は僅か17%で，これだけは投入増加分によって説明できるが他の83%が「残余」要素によるものであるとされている。また，アルゼンチンでは1912年から1914年および1945年から1949年に62%の産出量が残余要素の投入によることだとされている。メキシコにおいても，1925年から1929年および1945年から1949年に50%の産出量が，残余要素の投入に起因しているという数字はそれなりの意味があろう。

なお，興味を惹くものとして，フィリップも前記の論文で次の国々の例をひき合いに出している。先ず日本とデンマークの実例がある，両国とも天然資源に恵まれていない貧乏な国ではあるが，その経済成長の速度は，天然資源に恵まれた豊富な隣邦諸国よりも早く，そして高い成長をとげている。この事情は人的資源の開発度合に起因させることができる。それというのも，日本とデンマークの教育発展はとくに急速で，隣国の到底及ぶところではない。ただ，フィリップはこの場合，比較的高い教育投資のどこまでが経済発展の原因であり，どこまでが結果であったかを決定することが問題である」といっているがまったくそのとおりである。エル，ギンズバーグも彼の「人間能力の開発」の日本語版での序文で同じく日本の優秀な成績を挙げている。[33] この実例で示されたことは，教育投資がどれほど高められたかによって，どれほどの経済効果が上ったかである。こうしたマンパワーと技術が経済成長に及ぼす影響は，西ドイツとイスラエル両国にもいえる。とくに両国とも，国外からの移住してきた技術人口を活用することによって経済への離陸（take off）を促進したことは，マンパワーの過剰と不足の国々にとってはもっとも好い例であろう。スイスの工業発展もそのマンパワーの優越によることといえよう。周囲が山にかこまれた小国で，石炭，石油をはじめとする礦産物に恵まれず，強いていうなればせいぜい水力発電ぐらいのものである。ところが精巧なる精密工業は世界のトップクラスに位している。このことは，いかに人民ひとりひとりが高度な技術と注意力を会得することによるということを示す。なお，オーストラリアとカナダは広大な土地と豊富な資源を有し，平均1人当り所得も高いが，経

済発展度においては，日本やスイスには遠く及ばない。次に論議の焦点をデンマークに当てよう。

19世紀以来，デンマークは農業生産の活動において遠大なる改革をやりとげ，今日の繁栄の基礎となり得たことは，義務教育が確立されて年数が長いためであるといった見解が，多くの識見あるひとびとの間にとられている。

台湾のような狭い国土と膨大な人口を抱えている国，特にたいした資源もない国にとって最も身近かな例は，日本の近代化が果した驚異的発展であろう。しかしながらわれわれは，日本経済の飛躍的発展の要因を語るとき，どうしても明治維新までにさかのぼらなければならない。周知のように，幕府が倒れて日本の維新政府がなした重要な仕事のひとつとして，先ず，義務教育制度の確立とその普及を挙げることができる。文盲も19世紀の終りまでに消滅した。文部省が出した『日本の成長と教育』と題する「教育白書」のなかで，「明治以来，わが国における教育の近代化に果たした役割は，いろいろな観点から評価されうるであろうが，とくにわが国の経済発展に関連して教育が果した役割は今日，世界各国から注目の的となっている。」[34] と述べているとおりである。ここで注目されている第1の点は，戦後の復興とそれにつづく成長である。第2点は今世紀においてきわめて急速な経済成長をとげた国々の中にその地位を占めていることであり，第3点はとくに，日本の教育の果たした役割が経済発展との関連において，近代社会のいわゆる「離陸期」において，日本がもつ不利な条件を教育の普及によって克服した点である。つまり，経済活動を活発に推進させるための基盤の培養に，すでに早くから力が注がれていた教育効果という事実が多くの日本研究者，経済学者に指摘されている。[35] 同じ古いアジアの大国として，当時の印度と革命前の中国は，広大な土地と，天然資源に恵まれていながら，90%以上の文盲を克服することが遅れ，そしてそれが経済開発の立ち遅れを生じさせたのとは非常に対照的である。[36]

なお，教育投資の収益を生産函数の分析から，歴史の先例のなかにみることによって立証しようとすることは，まだそれなりの困難があろう。経済成長は残余要素，組織や技術などの残された強力の要素に依存するものであることが証明できたとしてもその要素をさらに分割して教育に関するところだけを抽出することは困難である。[37] それは恰も車の両輪のように相互補助してこそ前進できるものである。

3. 教育の収益の測定方式

教育投資収益率を測定するもう1つの方法に投資方式がある。それはいろいろの職種別卒業生の就職報酬から利子率を割り引いて合計し，その総額と就業に関わりのある教育費用に，両者の「複利」と「機会資本」を加えたものを比較することによって，教育投資の収益を推計することである。ベッカー（Beckor）はまず出発点としてこの方法を基礎に，アメリカの国民経済研究所（National Bureau of Economic Research）で計算を試みた。彼はアメリカにおける高等学校教育や大学に投資した資金から得た教育の収益を算出するといった収益の測定をすることから始めた。[38] ところでこうした収益の計算には資料，統計の慎重なる処理が必要である。この場合計算を行なう際に必要な統計資料を備えている経済先進国の方が確率性が高いといえよう。ともあれ，このような教育の収益に関する測定方法はまだまだ万全といえない。人の全生涯にわたって測定されるこの方法，異った職種のサラリー，賃金率および雇用水準に関して，長期的仮定を卒業するまでとし当然ながら確実性を欠くということ，そのうえサラリーの多少と職業階層の予測

も併せて慎重なる処理を要する。また，教育収益が算出されたとしても，それは父兄をして大学に自分の子弟を送るか否かを決める際に参考の1つにはなるかもしれないが，それからといって大学へやった場合に増加する経済の総和が直ちにイコール国の収益とはいえない。それは高等教育を受けたことによって，収入がそれだけ増えたとしても，それに対して支出もまた大きくなるからである。なお，この利益のすべてを教育に帰することはできない。教育と親の所得には重要な相関関係があることを忘れてはいけない。このことはさらに研究の余地がある。[39]

教育投資の収益はまた社会進化の情況によって示される。すでに述べてきたH・Mフィリップはこれについてダンロップ（John. T. Dunlop）が1962年9月に第次世界会議に提出した「生産要素評価論」(Evaluation of Factors Affecting Productivity) と題する論文から次のことを引用している。すなわち，かりに20世紀までの科学，教育制度および管理組織が変化しないままで生産性の増加に役立つその他一切の要素もすべて開発しつくしたとしてもその間の『生産力』は果してどれほど増加したことになったろうかと考えてみることは興味深いことである。もちろん，これは実験できる問題ではないが，生産性の向上が先進国における実際の記録と比べてほんの一部分に止まったであろうということは，誰もが賛意を表するに違いない。資本形成，労働者の訓練およびモチベーションの役割が過小評価されることは誤りであろうが，それは経済を動かす基本的な力としては，短期の限られた意義しか持たないのである』[40] と。ダンロップの論文に示された考え方は，いまや開発途上国だけではなく，先進諸国にとっても，ますます教育に対する重要視の度合いが深められてきていることを示しているといえよう。

七　教育投資の社会文化の面に果す役割

1.　知的労働における学習と創造活動

これまでの論述で，教育の投資効果を経済との結びつきでみてきたが，このことは決して教育の精神的側面を無視するものではない。とくに知的労働と肉体的労働の間の本質的な相違をなくしていくという課題は重要である。ところで教育投資の収益を純粋なる労働の結果と想定している人も少なくないが，実際上には教育投資の効果はそれだけではない。たしかに，S. ストルミリンが『ソ連における教育の経済学』[41] という一文で明らかにされているように，労働生産性は，いろいろな要因によって決定されるが，その最も重要なものは高度の技術水準である。そしてそれは，学歴と関係づけて教育の効果は，学校教育に対する社会の支出とその結果生ずる国民所得の増加分と比べることによって測定できる。また，西洋諸国では，学歴の急速なる増大によって，あらゆる知的職業において，労働者の供給過剰を招き，失業者が増え，著しい低賃金の現象を招くことになりがちであろうが，S. ストルミリンは国民の学歴水準の向上によってソ連にはその心配がないという。

また，より合理化のために，ひとびとがそれぞれの仕事に対する熱意をかきたて，倦怠や無関心を追放すること，新しいアイデアや新しい研究課題の挑戦が待ち受けていることとを知っているから，生活は有益であり，人は喜んで働きに行く。職場では，このようなまったく新たな目標に自らを向け，合理化とは，熱中させる情熱である……という。

これは創造的努力の詩興を味わえることが，それがもたらす仕事への情熱によって，人の人生

全体に新しい意味が与えられるということである。

この知的労働は，学習と創造活働を結合したものである。それは生産活動以外あるいは労働時間外に行われるものであるから，その真価を測定するのは困難であろう。このような公教育の成果はまた科学の信頼をもつというのである。結論においてストミリンは，文化的革命と経済開発の緊密の結びによる公教育への投資は，きわめて高い効果をもたらすと。それは，『この投資が，働く大衆の文化的関心を満たし，同時に経済開発の客観的必要条件をみたすからである。このようにして文化要因は，経済的にみて生産的かつ有利なものであることがますます明確に理解されるにいたった』[42] というが大いに参考に価えよう。

2. 人文社会全般の発展に果す役割

教育は，経済的，社会的観点からすれば，国民がもっているいろいろな価値や技術を伝えるとともに，進歩に必要な変革に備えるための主要な手段である。一方教育はそれが行なわれている所産でもある。純粋な文化の観点からすれば，教育投資は人類の生活を如何に豊かにしてくれるだけではなく，ハービソン[43] も指摘しているようにそれは，「よき公民となるための教育，生活の充足のための教育，或は人類の自由や人格の尊厳，および生存価値を増進するための教育など，これらはみな近代社会が求め推進している文化目標の一部分であるにすぎない。」[44] いずれにせよ，教育はその社会の構造，国民の文化目標，種々の職業に対する要求とそれに与えられた地位，国の予算規模や財政能力，一般的な政治や行政の制度などに左右されるものである。

この他に，人的資源の発展は，財貨や労働の創造を達成することにより，人類の貢献に役立つことも主なる目的の1つである。いかなる国にとっても，才能と学識経験豊かな政治リーダーが必要であり，学識と品徳のある法律家や司法官が必要であることはいうまでもない。また，厳格な訓練を受けたエンジニア，医師，経営者や芸術家，作家，技術工およびジャーナリストなども大いに必要とする。過去において多くのヒューマニストが，人間自身の教育目的を経済事情から遊離し，限定していることを憂慮し，エコノミストが経済と教育の対立について論識をかわしているが，しかし，彼らは，教育の面における「財貨」の問題にだけに注目して，教育が文化と精神面に対する発奮作用を軽視している。事実，教育投資が産み出す莫大なる収益は，決して数字的に表われた「財貨」のものだけではない。

ところで教育は人類の精神，知恵，天才および職業性と専門的な能力に対してのバランスの働きと，社会全体の発展に資する能力を持つものであることは何人も否定できない。したがって，こうした見方はヒューマニストとエコノミストの観念論を集大成したものといえよう。これについて，ハービソンや康代光はエコノミストとヒューマストとの間には対立する必要がないという。それは今日一社会進歩の主要な目的の一つが，急速な経済成長であるならば，人的資源開発のプログラムは，生産経済に必要な知識，技術および刺激を用意するようにデザインされねばならないからである。もし教育投資が生産的でなければならぬという観念を拒否するならば，急速の経済進歩の目標を拒否する用意をすべきであると，ハービソンたちがいうのである。しかし，もし急速な経済成長の目的と，教育が重点的に経済成長を促進するようその方針を定めるべきと受けとられるならば，教育の彼割についてのヒューマズムを肯定することになる。人間自身のための人間開発はなお究極の目標と考えられるかもしれないが，経済進歩もまたそれを達成するための

1つの主要手段でありうる。

人的資源の発展はすなわち，基本的財貨やサービスの生産増加のためであり，またそれと同時に，人間の尊厳と自由およびその生存価値を維持し，更に発展させるものであるということである。こうした論旨についてハンナもまた上述の2つの目的は密接に適応しあい一体となって，個人に，そしてまた社会の発展を促進すべきであるといっているとおりである。

ところで康代光も認めているように，教育制度の改変は決して単に古いものから新しいものへと代るものではなく，新らしい事実を授け，旧い観念を充実させることである。それには，現行の教盲目的，カリキュラムおよび教授法などは改革刷新するべきである。教育内容および教育の過程はマンパワーの開発および社会福祉の促進の目標と連接しなければならない。数多くの経済学者，経営学者，教育学者などの論旨から教育が経済と社会発展のためにその使命を果すことは，とりもなおさず，新らしい教育自身のための発展にもつながるからである。われわれはこうしたプラス面に対して目を閉じるべきではない。

3. 国民の所得を高める役割

前のパラグラフで国家教育投資のモデルと人的資本の創造についてハンナの説を述べてきた。教育投資の収益は，「投入，育成，産出機能」の反復変化によってもたらされた結果である。[45] この3つの順序過程を経て，教育投資が収益にかえってくるプロセスのモデル図式についてはすでに一部分の教育学者，またはハービソンたちによって解明されているとおりである。[46]

なお教育投資の資金，経常項目の支出の他にも，資本支出があり，教室の建築，テキストの購買，カリキュラムの修正，教育用ＴＶセットの購買等に使われていることについても康代光の指摘しているのをまつまでもない。このことはさらに教育の内容は，したがって生産方法に照し，実際の教材を編集することによって，教育の成果を促進することができる。こうした教育制度の下において学び終えた者が，国や社会のために，いろいろな職種の技術マンパワーの一員となって，経済成長を促進する役目を果すことはいうまでもない。[47]

4. 政治やその他国家の利益にに対する役割について

前述のハンナのモデル図式でふれたように，教育投資の効果は，マンパワーの増加を獲得する他に，次にあげられる国の利益をもたらすものになる。

(A) 人民が国の目標および政策に対する理解能力が培養されること。

(B) 人民が国家目標を尊重すること。

(C) 個人および団体が国の目標達成に対し促進の役目を果せること。

(D) 国家の発展の必要とするリーダーと優秀な労働者の均衡がたもてることなどある。

ま と め

ところで以上の考察から，わたくしは上述の役割に対し，個人ないし人間性を尊重し，政治，経済だけを強調することに止らず，さらに社会文化の面にも配慮し，バランスのとれた教育投資こそ必要であると思うのである。

注

(1) Adam Smith "An Inquiry in to the Nature and Causes of the Wealth of the Nations" (Connaned; Newyoɹk: Random House, Iuc 1937) pp. 265-266 アダム・スミス『国富論』(二) 大

内兵衛訳　岩波書店17頁

(2) Theodore W. Schultz; "Investment in Human Capital. "The American Economic Review. Vol. 51, No. 1. March 1961. p. 3.

(3) Alfied Marshall "Principles of Economics" 8th ed: Macmillan & Co. London 1930. pp. 216–218. 564

(4) 張果為主編「台湾経済発展」台北正中書局　1967年　康代光「経済成長与教育発展」839頁

(5) 川田寿「経済計画と人間能力開発のストラジー」(「アジアの人的資源開発Ⅰ」高橋式編；アジア経済研究所，1968年　29頁

(6) 川田寿　前掲論文　29頁

(7) Jaseph A, Schumpeter; "the Theory of Economic Development" Oxfordu, Press, 1961. pp 19–20.

(8) 井上毅：『人的投資の理論』ペリカン社　1969年　7～78頁

(9) Theodove W. Schultz; ibid

(10) シュルツ，豊田俊雄訳「人的資本への投資」26頁

(11) Theodore W. Schultz; ibid 康代光　前掲論文にもこれを引用している。

(12) Simon Kuznets; six Lectures on Economic Growth, "The Free Press of Glencoe, N.Y. 1959. p. 79 張果為編前掲書，康代光論文　839頁

(13) 井上毅　前掲書　84頁

(14) H. Leibenstein; "Economic Back wardn-ess and Economic Growth" 1957: 矢野勇訳『経済的後進性と経済成長』

(15) Jvoisey: "The Economic of Education" 1962

(16) E. Ginzberg: "Human Resources, The wealth of a Nation" 大来佐武郎訳『人間能力の開発』。

(17) Edward F. Denison; Sources of Economic Growth in the U. S. and Alternative before Vs. Committee for Economic Development, NY. 1962 川田寿前掲論文引用

(18) E. F. Denison; Measuring Contribution of Education to Economic Growth, the Residual Factor and Economic Growth. O. E. C. D. Paris, 1964　川田寿前掲論文　31頁

(19) バードランド・ラッセル「教育と社会体制」鈴木祥蔵訳　明治図書　161～173頁

(20) ラッセル前掲書　162～163頁

(21) 同前掲書　163頁

(22) 同前掲書　163頁

(23) 同前掲書　163～170頁

(24) Joseph A. Lauwareys; "Economic Progress throuqh Education" "Purpose and Function of University." ミヤザキヒロシ訳「教育による経済の発展」

(25) 井上毅前掲書　95頁

(26) Peter F. Drucker; "The Landmarks of Tomorron" 現代経済学研究会訳『変貌する産業社会』，井上毅前掲論文　97頁

(27) F. Harbison. Charles A. Myers "Education. Manpower and Economic Grouth" 1964. 川田寿，桑田宗彦訳「経済成長と人間能力の開発」ダイヤモンド社

(28) 康代光，沈曾折『教育投資及其収益問題研究』(「中央設計考核委員会専題研究叢刊」1962　17～38頁)

(29) 井上毅『人的投資の理論』では，教育投資について，計測は制約的となる前提条件がきわめて多いと。その制約要因を大きく分けて教育という事からの性質に由来する本質的なものと，計測データが整備されていないことによる統計的なものとがあると指摘している。177～190頁参照。

(30) J. A. ガス『OECD と教育の拡大』(The OECD Observer; 1967 4月) によると，OECD (経済協力の開発機構) が主として大学の経済学者，社会科学者からなる研究グループが設立による成果である。OECD のクリステンセン事務総長の発議により，エスベルソン，F. エディン，L. エルヴィン，H. ハビソン，J. テインバーゲン，J. ベイジーなどの権威学者の動員研究を契機に教育を投資と考える風潮が全世界に広がっている。

(31) H. M. フィリップ「教育と開発」"Economic and Social Aspects of Educational Planning" 1964 本田宏訳『教育計画』71～72頁

(32) T. S. Schultz "Economic Prospects of Primary Products" ("Economic Development for Latin America" 国際経済協会が開催した会議議事録; 1961) pp. 308～331

(33) Eli Ginzberg ibid H.M. フィリップ前掲論文 72頁

(34) 文部省調査局『日本の成長と教育—教育の展開と経済の発展』昭和37年11月，8—9頁。なお，同じく文部省が中央教育審議会中間報告としてまとめた「わが国の教育のあゆみと今後の課題」にも同じ趣旨のことが随所に指摘されている。特に第2部第3章で，教育投資の経済的，文化的効果を実証的方法論でアプローチしている。

(35) 一例をあげれば Herbert Passin "Society and Education in Japan" Columbia University. 1969 国弘正雄訳「日本の近代化と教育」1969 4～6頁

(36) Eli Glnzberg ibid p. 2.

(37) 残余要素が教育に占める割合の推計については，E. Denison 著，Source of Economic Grouth (New York, Committee for Economic Development. 1962) H. M. フィリップ前掲論文 73

(38) "Reflections on Investment in man" The Journal of Economy, Vol. LXX, No. 5. part 2. October 1962 The University of Chicago Press.

(39) HM. フィリップ前掲論文 74頁

(40) HM. フィリップ前掲論文 75頁

(41) S. ストルミリンのこの論文は，Vnescs International Social Sciences Journal Vol. XIV. No. 4 1962年 633—646頁に掲載している。

(42) HM. フィリップの前掲論文 74頁

(43) F. Harbison, C. A. Myers, "Education Manpower and Economic Growth" McGRAW—Hill Book Co, New Yor 1964 p. 11～14 康代光前掲論文 848頁

(44) ハービソンたちは，Manpower Education and Economic Growth An Insttrument of papers presented at 1961 Cubberley Conference, School of Education, Stanford Uuiversity, McGraw Hill Book Company. Inc. New York, 1962, pp. 2—3. 一書に次のように引用している。例えば，Robert Ulich は工業化および機械化の傾向に追従して無感覚になっていると，彼が考えている人々に対する解毒剤として，教育を評価しているようにみえる。そこには経済成長への貢献について何の記述もない。The Education of Nation; A Comparison in Historical Perspective; Harvard University Press, Cambridge, 1961 Chapw "The Era of Technology" Paul R. Hamua は次の見解を表明している。『人的資源は伝統的に，社会生活に必要な多少不活性なインプット，ファクターの一つと思われてきた，これに対して，われわれは，いまや人的資源が，結果的に社会の性質及び行動を創造的に決するもので考えている。もし，民衆の知識や技術が社会の潜在力をうまく利用するに不適当であれば，その社会的賢明にも人間開発に投資する他の社会に追い越されるであろう。もし国民の生存と進歩のために成長率が重要であるならば，計画された教育投資は，極めて重大な要素となる。」康代光前掲論文 849頁にもこれを引用している。

(45) Paul R. Hanna "Conventional and Unconventional Education for newly Developed Countries" 1962 Ibid: William J. Plat "Education-Rich Problems and Poor Markets," Management Science, Vol. 8, No. 4. fig 1. p. 410, July 1962. Engenee Staley. The Future of Underdeveloped Countries: Political Implications of Economic Development, Published for the Council of Foreign Relations by Frederick A. Paregər. New York. 1961 (rəved) especially Chap II "Human Resouces and the Organization Factors," pp. 228—250 参照

(46) F. Harbison, C. A. Myers, Ibid. p 3

(47) 康代光前掲論文 850頁

The Anglo-Satsuma War in 1863: From "The Navy": Translation Continued

Kumiko Kondo

The Namamugi Incident which was the direct cause of the "fighting" between England and Satsuma in 1862 took place when the procession of Lord Satsuma was on its way to Yedo. Kizaemon Narahara, at that time, was leading the procession. When a group of Englishmen crossed the procession, refusing to clear the way for it, Narahara, unsheathing his sword, slashed at a certain Richardson and two other men, but he did not harm their female campanions. However, other Englishmen stated that Lord Shimazu who was riding in the palanquine had shouted, "Kill them! Kill them!" This statement was not true. The Lord, upon hearing the particulars of the event, quietly picked up his sword which had been placed on his right side, and laid it on his left, and said, "Well, is that so?!" And, when he knew the event was over, he quietly replaced his sword to his right side again. That is all.

Nevertheless this trifle event caused a great uproar. England brought her naval squadron in China to Yokohama Harbor, and made two demands on the Japanese Government. They demanded the Government compensation of 25.000 pounds and the decapitation of the slayers of the Englishmen. The Tokugawa Shogunate was much confused, and tried to appease the English by paying a compensation, one hundred pounds, while Satsuma looked on it with indifference, and exhalted national prestige without offering neither the compensation nor the slayers. And this made John Bull indignant toward Satsuma.

On June 22nd in the 3rd year of Bunkyu (1863) the six warships, with the flagship 'Euryalus' at the head, left Yokohama for the gulf of Kagoshima, and tried to bring Satsuma to the knees under one thousand blast.

This intimidation, however, took no effect, because at that time the people of Satsuma had no knowledge of the English people, and some of them even thought that they had no heels. It was reasonable to think that a person with no heels would be easily knocked down. Therefore they couldn't help but look down upon them. Again, when one of the officials of the Satsuma clan had visited the British flagship, he met an English naval officer who had a long beard. He pulled the officer's long beard and said, "What a long one you have!" The officer was struck with dismay.

At another occasion when Lord Shimazu saw the gigantic flagship 'Euryalus', he ordered his men not to fire at the white ship. The reason was that he intended to capture it and use it when he had to attend the Shogun's court.

The Event between Satsuma and Britain had a jolly phase as well as a heroic one. The so-called "trick of Water-melon ship" was one example. By the suggestion of Narahara who had killed the Englishmen at Namamugi, 80 death-defying Samurai were to set out in 7 water-melon boats, disguised as water-melon sellers. They were to climb

over the sides of the enemy vessel and slash the heads off as many enemy sailors as they could. After this was done they were to commit 'harakiri.' Meanwhile from the shore, the batteries were to fire at the enemy ship and sink it. It sounded like a wonderful plan. However, it was not, because the English people at that time despised eating water-melon as something that the Negroes liked to eat. No Englishmen would buy it. Moreover, even though these death-defying Samurai themselves believed that they were perfectly disguised as tradesmen, all their eyes were glittering like those of eagles, and it was said that from under their attires the swordhilts peeped out; thus exposing their mission themselves to the English who naturally took every precaution.

Thus this trick was ended in a failure. You must not forget, however, that among these Samurai, there were late Marshal Oyama, Tsugumichi Saigo (Fleet Admiral later), Kageki Nire (Admiral later) and others. The latter two had a close connection with the Imperial Navy. It is a well-known story that when Heihachiro Togo (Fleet Admiral later), during his first campaign at 17 years of age, was bravely working at the battery, he was confirmed his belief that "The enemy from the sea must be checked on the sea, not on the land."

The battle actually began at noon on July 2nd, amidst violent wind and rain. It is said that whenever a foreign ship appeared on the waters of Kagoshima, a fierce storm arose, and so was it on this day too. The warriors, drenched to the skin in the heavy rainfall, fired the first shot from the battery at Temposan in the southern end of the Peninsula. This first shot was a signal to open fire. Soon afterwards all other batteries on the shore began to fire one after the other.

They did not think that Japan would fight against them to the end, therefore they did not seriously prepare for the fighting. On the other hand Japan began to fire desperately from every battery on the land. This was too much for the upset English.

In the excitement, one of the British ship, 'Perseus' even cut off her anchor to flee away. For a navy, to have one of its ships cut off her anchor is really as disgraceful as leaving "one's pair of pants" at somebody else' home.

The flagship 'Euryalus' in great haste headed to a point half a mile from the shore, and commenced to fire. This was the spot where our Troops had formerly placed their practice target. Therefore our battery responded to the enemy fire with utmost exactness. Three shots from our battery blew up the deck, and the captain and the vice-captain fell on the spot.

The damage on our side was great too. The enemy had many advantages over the Satsuma troops. The shooting range of the Satsuma cannon was only about five-seven of a mile, while that of the enemy Armstrong was three miles. Not only that, but the enemy had one hundred one cannon to Satsuma's eighty-nine. The battery at Gion-no-su was badly damaged. The artillery was bent like "wheat-gluten" and the platform of the gun was blown away. It was utterly of no use. Yet the morale of the whole troop on Satsuma side became higher. Through the violent wind and rain the drum was clearly audible. The drummer at that time was Ito (Fleet Admiral later).

Shuseikan, an arsenal, was destroyed in the battle, and ten percent of the farm houses were burnt to ground. On July 3rd the wind and rain began to calm down. Then the British fleet finally began to retreat. The course which they took was just between Okino-Kojima and Temposan.

There was also a battery at Okino Kojima, but not even a single shot had been fired from the cannon on the previous day's battle. The head-person of the battery force had a queer name. His name was Guchi Aoyama. 'Guchi' means 'an idle complaint.' He was an artillerist of the old-fashioned Tenzanryu. It is said that when the British warships approached toward Okino Kojima, he patted the round cannonball and begged it as though it had been a human being. "Do your very best!" he said to it.

There had been another joyful expectation on Satsuma's side. Between Okino Kojima and Maezaki had been submerged three electric mines which Naosuke Nakahara had invented. The British would have been completely blown up, had the soldiers at Okino Kojima been more patient. The moment the battery there impatiently fired, the British warships suddenly turned their course, retreating to Kanze, and fiercely fired back. An enemy shot which came within range inflicted severe injury upon Naohachi Inoue, who was afterwards promoted to the rank of Fleet-admiral. Later he named himself Ryoko Inoue.

Looking back on the Anglo-Satsuma war, it seems that this fighting was an incubator for many great generals and admirals. Oyama, Kawamura, Nozu, Saigo, Togo, Ito, Inoue were all distinguished Marshals or Fleet Admirals, and most of them excepting the former three were of the Navy. Kageaki Nire, Genroku Akatsuka, Kanehiro Ishuin who later rendered great services to the Imperial Navy also had taken part in this war. There was also Admiral Gon-bei Yamamoto, who at that time, was only 12 years old. As he was too young to operate any battery, he worked hard carrying cannon shells to the batteries. It seems also that this Anglo-Satsuma war not only gave a great incentive to the people of the Satsuma clan but also greatly stirred the Imperial Navy as a whole.

The British fleet, in the meantime, retreated to the offing "Konedome," and after making necessary repairs, sailed back to Yokohama. Thus ended the war.

The casualties suffered by both sides were unexpectedly small. There were 13 killed and 50 wounded on the British side, and one killed and 6 wounded on the Satsuma side. Judging from this result Satsuma seemed to have won a complete victory over the British. But as a matter of fact, it was not true. Every battery and arsenal Shukokan were badly damaged. Three merchant steamships which were considered to be their treasure boats were also destroyed.

All in all, the war ended in defeat for both sides. In the battle of Warships versus batteries, Satsuma should have had an advantage over the enemy: the Satsuma were overwhelmed by a fallacious notion. They were led to believe that the strength of the British warships and ordnance were far superior to theirs, and felt a kind of inferiority complex before the power and might of the English vessel of 2,300 tons, of 11 knots, and of the Armstrong cannon which had the power to fire conical cannon

shell at greater distance.

As it was written in the book, Masato's native land had writhed in agony during the war. Old fogeys had scornfully had talked of Lord Nariakira Shimazu (1809–1858) as "Dutchfied" for using the enemy designed shells. Those people had used the Japanese matchlocks again after Lord Nariakira's death. But now they could not help admitting to themselves that these old matchlocks always became useless in the rain. Japanese ones were far inferior to those of the English. And one never could tell when the English would attack Satsuma again. Then what would happen?

Just at that critical moment, the leaders of Satsuma, not being bound by pride nor temper, suddenly decided to shake hands with the English, and peace was restored once again. This unexpected action of the Satsuma men was thought to have been quite respectable and brave. It did not mean that they had given in to the British. It was for them to study under the British people their science of war which far excelled that of Satsuma. The negotiation for peace between England and Satsuma was immediately concluded because of the necessity on the side of the English to check the strength of France. This fact was also written in the book.

In the third year of Keio (1867) the 'Princess Royal' and two other warships entered Kagoshima harbor. On board were Commodore King and Minister Parks. The battery of Satsuma fired again, but this time it was a gun salute. The reception held for the visitors to the Lord of Satsuma was one of the most gorgeous ever held. More tnan forty different dishes, besides beer and champagne were served. The English guests are said to have eaten only the chicken and pork, leaving the rest, untouched: the champagne and beer also seemed to be their favorites. Champagne and beer in those days in Japan! Later the Satsuma leaders, as a courtesy demonstrated the field-gun invented by Naosuke Nakahara.

Nakahara made his appearance, wearing a 'hakama' and a black woolen overcoat with a red lining. After bowing to the Lord, he commanded the six field-guns to be fired. And lo! Every gun hit the center of the target out in the offing. The visitors could not but spontaneously applaud.

論　叢　（第四巻）

昭和四十八年三月十五日　印刷
昭和四十八年三月二十九日　発行

発行者　東京立正女子短期大学
東京都杉並区堀ノ内二―四一―一五
電話　代表（三一三）五一一〇一

印刷所　株式会社早稲田大学印刷所
東京都新宿区戸塚町一―五八

編集委員

庄司寿完
小林幹男
岡本天晴

Tokyo Rissho Junior College for Women

Ronso

Contents

A Study of Ten Realms (十法界) in Boddhism	Tunemaru Iwamoto
A Study on Two Works of William Blake	Kumiko Kondo
A Note to The Woodlanders	Mikio Kobayashi
Hui-chiao's View on The Wang-sheng (亡身)	Tensei Okamoto
A Study in Teaching Typewriting (2)	Midori Iguchi
A Study of the Theory of Economy in Education	Ching-han Chung
The Anglo-Satsuma War In 1863: From "The Navy" Translation Continved	Kumiko Kondo

1973